

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第706集

はしまだたて

挾田館跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第706集

挾田館跡発掘調査報告書

2019

国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

2019

国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所

（公財）岩手県文化振興事業団

挾田館跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されており、それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、その調査の記録を保存とする措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して、平成28、29年度に実施した挾田館跡の調査成果をまとめたものであります。

今回の調査では、中世城館の腰曲輪、平場などの遺構が検出され、三陸沿岸部での中世城館の様子を明らかにすることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所、大槌町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例 言

1. 本報告書は、岩手県上閉伊郡大槌町大槌大槌第23地割沢山153ほかに所在する扶田館跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 本報告書掲載の遺跡の調査は、三陸沿岸道路建設に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受諾事業として実施した。
3. 扶田館跡の岩手県遺跡台帳の登録の遺跡コード番号並びに遺跡略号は以下のとおりである。
扶田館跡 番号：MG33・0092 略号：HDT・16、HDT・17
4. 野外調査面積及び調査期間、室内整理期間、及び担当者は以下の通りである。

		調査面積	期 間	担当者
平成28年度	野外調査	2,994㎡	平成28年10月3日～12月12日	羽柴直人 對馬利彦 酒井野々子
	室内整理		平成28年12月22日～平成29年3月31日	酒井野々子
平成29年度	野外調査	4,016㎡	平成29年4月6日～6月2日	羽柴直人 對馬利彦 出町拓也
	室内整理		平成29年11月1日～平成30年3月31日	羽柴直人 對馬利彦

5. 野外調査での遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付職員が担当した。
6. 本報告書の執筆は第I章第1節を国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所が、その他を羽柴、對馬、酒井が各担当部分を分担して執筆した。
7. 実測委託・各種鑑定・分析等は以下の機関に委託、依頼した。
航空写真撮影・・・東邦航空株式会社
座標原点の測量・・・釜石測量設計株式会社
表土除去、排土処理等・・・アート工業株式会社・有限会社藤倉建設
瀬戸産陶器の鑑定・・・藤澤良祐（愛知学院大学教授）
8. 野外調査及び報告書作成にあたり、次の方々の協力を得た（敬称略・順不同）。
鎌田精造（大槌町教育委員会） 小向裕明（大槌町教育委員会） 千田和文（大槌町教育委員会）
9. 調査成果の一部は平成28年度調査概報（岩埋文第676集）、平成29年度調査概報（岩埋文第692集）現地説明会資料等で公開してきたが、本書の内容が優先するものである
10. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	2
2 周辺の遺跡	2
III 調査と整理の方法	
1 調査の経過	7
2 野外調査の方法	7
3 室内整理の方法	8
4 基本土層	8
IV 検出された遺構と遺物	
1 扶田館跡全体の概要	14
2 検出遺構	14
3 出土遺物	35
V 総 括	
1 扶田館跡の全体の概要	41
2 今回検出の遺構	41
3 出土遺物	43
4 扶田館に係る文献等	43
5 ま と め	43
写真図版	
報告書抄録	77

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	6	第3表 金属製品観察表	37
第2表 陶磁器観察表	35	第4表 銭貨観察表	37

図 版 目 次

第1図 地形分類図	4	第14図 平場5	24
第2図 遺跡位置図、周辺の遺跡	5	第15図 平場6	26
第3図 基本土層	9	第16図 平場7	27
第4図 扶田館全体図	10	第17図 平場8	28
第5図 扶田館全体断面図	11	第18図 平場9	30
第6図 調査区域内測量図	12	第19図 犬走1	31
第7図 遺構配置図	13	第20図 犬走2	32
第8図 平場1	15	第21図 調査区北側部分(レベルバンク)	34
第9図 平場2	17	第22図 出土遺物(1)	38
第10図 平場2、S I 1	18	第23図 出土遺物(2)	39
第11図 S I 1	19	第24図 出土遺物(3)	40
第12図 平場3	21	第25図 扶田館と大槌城の周辺	42
第13図 平場4	23		

写真図版目次

写真図版1 航空写真(1)	47	写真図版16 平場8	62
写真図版2 航空写真(2)	48	写真図版17 平場9	63
写真図版3 扶田館跡3D図	49	写真図版18 犬走1・2	64
写真図版4 中世の陶磁器	50	写真図版19 竪穴建物S I 1断面	65
写真図版5 扶田館跡風景	51	写真図版20 竪穴建物S I 1完掘(1)	66
写真図版6 頂部から下方風景	52	写真図版21 竪穴建物S I 1完掘(2)	67
写真図版7 中段から頂部・下段風景	53	写真図版22 竪穴建物S I 1関連の柱穴(1)	68
写真図版8 下段から上方風景	54	写真図版23 竪穴建物S I 1関連の柱穴(2)	69
写真図版9 平場1	55	写真図版24 調査区北側(レベルバンク)	70
写真図版10 平場2・S I 1	56	写真図版25 遺物出土状況	71
写真図版11 平場3	57	写真図版26 作業風景他	72
写真図版12 平場4	58	写真図版27 現地説明会	73
写真図版13 平場5	59	写真図版28 出土遺物(1)	74
写真図版14 平場6	60	写真図版29 出土遺物(2)	75
写真図版15 平場7	61	写真図版30 出土遺物(3)	76

I 調査に至る経過

扶田館跡は、三陸沿岸道路「釜石山田道路」の道路改築事業に伴い、その事業域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。三陸沿岸道路「釜石山田道路」は、岩手県釜石市甲子町第13地割（釜石JCT（仮））から岩手県下閉伊郡山田町船越（山田南IC）を結ぶ延長約23kmの自動車専用道路として平成5年度に事業化しており、この区間のうち、釜石両石IC～釜石北IC間（延長約4.6km）は平成23年3月5日に供用している。

また、釜石JCT（仮）において東北横断自動車道釜石秋田線（釜石～花巻）と連結している。

当該区間の現道国道45号には「恋の峠」という急勾配、急カーブの交通の難所があり、この難所の早期解決を目的に釜石両石IC～釜石北IC間（延長約4.6km）について先行的に整備を行い、平成23年3月5日に開通、その6日後の3月11日に東日本大震災の津波が太平洋沿岸を襲ったことところであるが、岩手県釜石市鶴住居地区の小学校・中学校の生徒等570名の津波からの避難場所、避難経路として機能した。

釜石山田道路をはじめ三陸沿岸道路等の既に供用していた区間は、東日本大震災において救助・救援や支援物資の輸送など「命の道」としての機能を発揮したとともに、新たに事業化が決定されていた復興道路・復興支援道路と併せ、東日本大震災からの早期復興への貢献、現道の隘路解消、交通混雑の緩和、交通安全の確保及び走行性、利便性の向上により地域間交流の促進や拠点間の連携強化、物流の効率化、定時制・速達性の確保により地域の産業・経済・観光等への貢献が期待されている。

さらに救急医療施設への救急搬送時間の短縮や医療施設間の連携強化、災害時の救助・救援活動の支援により地域の安全・安心の確保に資するものである。

また、「いのちを守り海と大地と共に生きる ふるさと岩手・三陸の創造」を目指す姿とする「岩手県東日本大震災津波復興計画」の3つの原則のひとつ「安全の確保」においても、「災害時の確実な緊急輸送や代替機能を確保した信頼性の高い道路ネットワーク」を構築する幹線道路ネットワークとして位置づけられている重要な社会基盤である。

当該道路事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月12日付け国東整南陸調品確第49-2号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課あて試掘調査の依頼を行った。岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課では、平成24年12月7日に試掘調査を実施し、平成25年1月15日付け教生第1421号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により埋蔵文化財が確認されたことから発掘調査が必要となるので工事に先立ちその取扱について岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と協議するように回答があった。その回答を受けて南三陸国道事務所では、平成25年2月25日付け国東整南陸調品確第1062-3号「道路事業における埋蔵文化財の発掘調査について」により発掘調査を依頼したところである。

平成28年度において、岩手県教育委員会教育長から平成28年2月26日付け教生第1771号「平成28年度埋蔵文化財発掘調査事業について」により（公財）岩手県文化振興事業団から提出された計画書に基づき協議及び契約事務を取り進めるように通知があったことから、（公財）岩手県文化振興事業団と協議を経て平成28年4月1日付けで発掘調査に係る委託契約を締結、調査を実施することとなったものである。

（国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所）

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

(1) 遺跡の位置と立地 (第1図)

挾田館跡は岩手県上閉伊郡大槌町大槌第23地割に所在する。遺跡が所在する大槌町は、岩手県の沿岸南部に位置し、北は山田町、北西は宮古市、西は遠野市、南は釜石市と接し、東は太平洋に面している。総面積は169.72km²で総人口は約12,051人(平成30年1月現在)を数える。町域は山地が主体であるが、三陸沖漁業が産業の中心を担っており、陸中海岸の景勝も含め豊かな天然湾の活用を力注いでいる。

挾田跡は岩手県立大槌高等学校の南約300m、大槌川北岸に所在する。今回の調査区域は北緯39度22分03秒、東経141度54分02秒に位置する。調査区は北側から延びる丘陵端部に立地し、調査前の状況は山林で、標高は5～48mである。地形図上では国土地理院発行2万5千分の1地形図「大槌」(NJ-54-7-16-4.13-4-2)、5万分の1地形図「大槌」(NJ-54-13-4)の図幅に含まれる。

(2) 遺跡周辺の地形 (第1図)

大槌町は町域の大部分を北上山系から成る山岳が占めており、支脈が丘陵として広がりを見せている。標高の高い白見山(1,173m)、高滝森(1,160m)、妙沢山(1,103m)などの山々は主に町域の西側にそびえ立ち、妙沢山南西の土坂峠に源を発する大槌川が山麓の間を縫って町の中央付近を南東流し、白見山の山裾から延びる小槌川がその南側を同様に流れて大槌湾に注がれる。これらの河川沿いの谷底平野及び氾濫平野を中心に市街地が築かれている。

太平洋に面した町の東側は北の船越湾、南の大槌湾ともにリアス式海岸が発達し、沖合で親潮と黒潮の交流する豊かな漁業場となっている。また景勝地としても活用されており、海岸風景は岩手県北部から宮城県気仙沼付近までを範囲とする陸中海岸国立公園の一部として指定を受けている。なお、これらは平成25年には青森県南部の種差海岸階上岳国立公園及び八戸市内の2地区を編入して、三陸復興国立公園へと名称が改められている。船越湾には海水浴場として有名な浪板海岸と吉里吉里海岸が所在している。そこから海岸沿いにやや南下したところに吉里吉里港が開かれ、市街地が形成されている。その東には船越湾と大槌湾を区切って北東に突出した吉里吉里半島があり、半島に沿うような形で時計回りに松島、野島、二才島、丸島、長根島などが浮かぶ。報告遺跡は、地形分類図上では中起伏山地の端部に所在している。遺跡のすぐ南側は浜、及び河原の地形分類となり、大槌川に面している。

2 周辺の遺跡

大槌町内の遺跡は平成28年3月現在で、101箇所が岩手県遺跡台帳に登録されている。この内、約半数は縄文時代の遺跡である。また鉄滓の散布地が23箇所あり、製鉄関連遺跡も多数存在している。そのほか、中世大槌氏に関する城館、近世の大槌代官所に関連する遺跡もいくつか見られる。分布状況を見ると、太平洋に面した市街地と国道45号線沿いの開発地域、また大槌川と小槌川の河口周辺に密集し、それら河川の流域にも数箇所所在している。

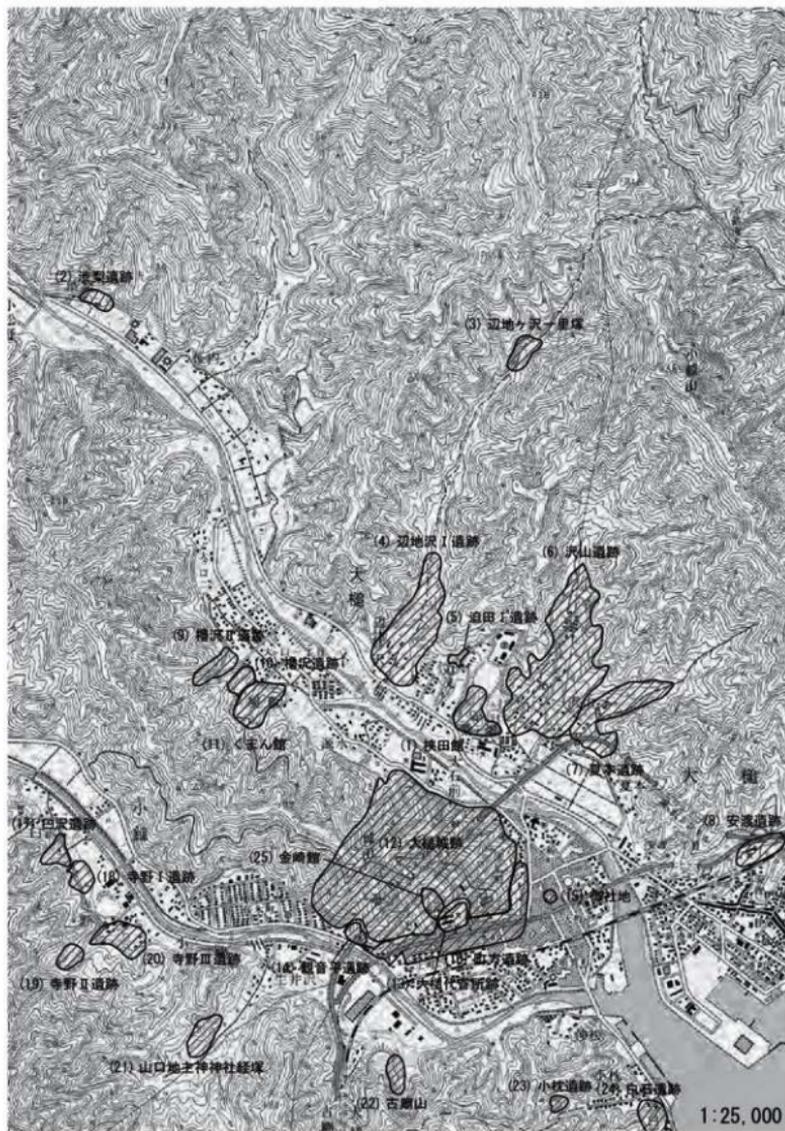
挾田館跡が所在する大槌川北岸には、西から東へほぼ連続する形で、(4) 辺地沢I遺跡、(5) 追

田I遺跡、本報告書の(1)扶田館跡、(6)沢山遺跡、(7)夏本遺跡が横並びに所在する。迫田I遺跡は平成28年度に三陸道路建設に係る発掘調査がおこなわれている((公財)岩手県文化振興事業団2018)。沢山遺跡は平成6年に個人住宅の建設に係わり発掘調査が実施された(大槌町教育委員会1995)。調査では縄文時代中期末～後期初頭の住居跡1棟、平安時代前半の住居跡2棟が検出されている。沢山遺跡については昭和41年刊行の大槌町史上巻(大槌町史編纂委員会1966)で取り上げられており、相当量の縄文土器、石器が蒐集されていたこと、蒐集された縄文土器は、前期、中期、後期の資料があることなどが記されている。夏本遺跡は昭和62年に国道45号大槌バイパス改良工事に伴って5,300㎡の発掘調査がおこなわれた((財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1989)。縄文時代中期の集落跡(竪穴住居25棟)と弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、古代(奈良、平安時代)の竪穴住居跡5棟、住居状遺構、鍛冶工房跡などが検出された。出土遺物では赤彩が施された土師器壺(球胴壺)が目される。また、夏本遺跡は昭和62年(上記バイパス関連調査の終了後)、小枝ヶ沢河川災害関連事業に伴い、大槌町教育委員会によって980㎡の発掘調査がおこなわれている(大槌町教育委員会1988)。調査では縄文時代中期の竪穴住居跡2棟が検出され、弥生時代の土器、土師器が出土している。

図示した範囲中での大槌川の南岸には、上流から(9)櫛沢Ⅱ遺跡、(10)櫛沢遺跡、(11)くまん館跡、(12)大槌城跡が並ぶ。櫛沢Ⅱ遺跡は、砂防ダム建設工事に伴い、平成9年に発掘調査がおこなわれた。(大槌町教育委員会1998)。調査では縄文時代の土坑、竪穴遺構、遺物包含層が検出され、遺物包含層では多数の縄文時代晩期の土器が出土している。また、古代と推測される鉄滓、羽口が出土し、近隣に製鉄炉跡の存在が予測されている。櫛沢Ⅱ遺跡の南東には櫛沢遺跡が所在する。昭和27年に調査がおこなわれ、大槌町史上巻にその概略が記載され、「奈良時代末期から平安時代初期」の製鉄遺跡と評価されている。この他、縄文時代晩期の土器も多数出土したと記される。櫛沢遺跡の南東に接して、北東方向に突出する丘陵端部に造成された中世城館くまん館跡が所在する。大槌城跡は大槌川南岸から市街北部に広がる広大な城館跡である。大槌町のシンボルともいえる城館であり、町民には「城山」として親しまれ、平成4年に県史跡に指定されている。公園化事業に伴った大槌町教育委員会による11次にわたる調査(大槌町教育委員会1995、1997)によって、堀跡、帯曲輪、掘立柱建物跡などが確認されている。この他、大槌地域では、大槌町教育委員会が平成6～8年に調査を実施した(13)大槌代官所跡(大槌町教育委員会1995、2007)、平成26年に発掘調査がおこなわれた大槌市街地と重なる(16)町方遺跡など、近世都市を構成する遺跡の調査も進展しており、県内では類例の少ない性格の調査として特筆される。

参考・引用文献

- 岩手県 1974「北上山系開発地域土地分類基本調査 大槌・霞ヶ岳」
 大槌町教育委員会 1988「夏本遺跡発掘調査報告書」大槌町教育委員会文化財調査報告書第2集
 大槌町教育委員会 1990「大槌町内遺跡分布調査報告書Ⅱ」大槌町文化財調査報告書第5集
 大槌町教育委員会 1995「沢山遺跡発掘調査報告書」大槌町文化財調査報告書第6集
 大槌町教育委員会 1995「大槌代官所跡発掘調査概報」大槌町文化財調査報告書第7集
 大槌町教育委員会 1997「大槌城跡一第6次・7次発掘調査報告書」大槌町文化財調査報告書第8集
 大槌町教育委員会 1998「櫛沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書」大槌町文化財調査報告書第9集
 大槌町教育委員会 2007「大槌代官所跡発掘調査報告書」大槌町文化財調査報告書第10集
 大槌町史編纂委員会 1966「大槌町史上巻」
 財団法人文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989「夏本遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第134集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018「迫田I遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第688集



国土地理院 1:25,000 大槌

第2図 遺跡位置図、周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	よみがな	種別	時代	遺構・遺物	所在地	調査経歴	文献等
1	狭田館(七郎館・十王館)	はさまだだて	城館跡	中世	空堀2条、平場、帯郭	大槌第23地割	H28～29年度調査	本報告書
2	金兼平	かなくそだいら	生産遺跡	不明	鉄滓	金沢第34地割	S53年範囲確認調査	S53年調査概要有
3	辺地ケ沢一里塚	へんちがさわい ちりづか	一里塚	近世	塚2基	国有林内		
4	辺地沢Ⅰ	へんちがさわⅠ	散布地	縄文	縄文土器	大槌字辺地沢		
5	迫田Ⅰ	はさまだⅠ	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器、住居跡	大槌第15地割	H28年調査	H30年報告書刊行
6	沢山	さわやま	散布地	縄文・平安	縄文土器(中期)、石器、住居跡、土師器	大槌第24地割	H16調査 個人住宅に伴う緊急調査	H17年報告書刊行
7	夏本	なつもと	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、弥生土器、住居跡	大槌第24地割	S62年(岩手理文・大槌町教育委員会)調査	S63年報告書刊行
8	安渡	あんど	散布地	縄文	縄文土器、石器	安渡2丁目		
9	櫛沢Ⅱ	やぐらさわⅡ	生産遺跡	縄文・奈良・平安	縄文土器(晩期)、土師器、鉄滓、羽口	大槌第11地割 字大ヶ口	H19年調査	H10年に調査報告書刊行
10	櫛沢	やぐらさわ	生産遺跡	縄文・奈良	鉄滓、縄文土器(晩期)、土師器、須恵器	大槌第14地割	S27調査	
11	くまん館	くまんだて	城館跡	不明	空堀、平場、帯郭	大槌第14地割		
12	大槌城跡	おおつちじょう あと	城館跡	中世	平場、空堀、帯郭、堀立柱建物跡、土坑他	小槌第32地割 字金崎	S58年～H11年まで第11次の調査	H19年報告書刊行 県指定史跡
13	大槌代官所跡	おおつちだいか んしょあと	史跡	近世	礎石建物、鍛冶場跡、柱穴列群	上町1番	H5年試掘調査 H6～8年本調査(大槌小学校建設に伴う調査)	H7年1次調査概要刊行
14	観音平	かんのんだいら	社寺跡	近世	平場	上町		
15	御社地	おしやち	社寺跡	近世	石碑、経石、石祠、理経碑	末広町3番地	H18年ふれあいセンター建設に伴う調査	町指定史跡
16	町方	まちかた	町屋跡	近世・近代	近世・近代町屋陶磁器 銭貨 上水道遺構 井戸跡	上町、本町、末広町と大町の 一部	H26年発掘調査	
17	臼沢	うすざわ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	小槌第20地割		
18	寺野Ⅰ	てらのⅠ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	小槌第22地割		
19	寺野Ⅱ	てらのⅡ	散布地	縄文	縄文土器、羽口	小槌第23地割		
20	寺野Ⅲ	てらのⅢ	散布地	縄文	縄文土器	小槌字寺野		
21	山口地主神社経塚	やまぐちじぬし がみじんじゃき ようづか	経塚	近世	埋経碑2基、石祠	小槌第26地割		
22	古瀬山	こびょうざん	社寺跡、経塚、散布地	縄文・近世	平場、石碑、石仏	小槌第28地割	H12年調査(林道建設に伴う緊急調査)	
23	小枕	こまくら	散布地	縄文	縄文土器	小槌第28地割		
24	白石	しろいし	散布地	縄文	縄文土器(後期)	小槌第28地割		
25	金崎館	かねざきだて	城館跡	中世	平場、帯郭、空堀	小槌字金崎	H10年林道建設に伴う調査・範囲確認調査	

Ⅲ 調査と整理の方法

1 調査の経過

平成28年10月3日(月)より調査を開始した。4日(火)には調査区に至る通路の整備もおこなった。5日(水)には、木根の少ない調査区南東部にトレンチを設定し、人力による試掘をおこない、遺物の包含の具合、遺構検出面を確認した。併せて調査範囲内の地形測量を開始した。測量調査の結果、調査区域内に平場9カ所、犬走2条が存在することが判明した。平成28年度は、犬走2条を含む斜面下部について調査を終了することとし、犬走2条の遺構精査、当該範囲の微細地形測量をおこなった。12月12日(月)には航空写真の撮影をおこない、平成28年度の野外調査を終了した。平成28年度の調査終了面積は2,994㎡となる。

平成29年4月6日(金)から、平成29年度扶田館跡の調査を開始した。4月10日(月)より下段平場、中段平場について、防護柵の設置後、雑物を除去し、各平場にトレンチを設置し、平場上の構築物の有無を確認した。下段平場、中段平場の調査については、5月前半までに概ね終了した。この間、調査区北側部分(レベルバンク部分)の雑物除去をおこない、重機による掘削で遺構の有無を確認した。また5月中旬より頂部平場の調査を開始した。平場頂部を構成する平場1、平場2にトレンチを設定し、平場上の遺構の有無を確認した。結果、平場2で竪穴建物遺構(SI1)が検出された。以後、SI1の掘り下げ、断面観察を行った。この間5月20日(土)には現地説明会を開催した。5月23日(火)には航空写真撮影を実施した。5月25日(木)には県生涯学習文化課、南三陸国道事務所の立ち会いのもと、終了確認が行われた。そして、6月2日(金)には調査区域から器材を完全撤収し、扶田館跡の野外調査を終了した。平成29年度終了面積は4,016㎡、28年、29年度分合計終了面積は7,010㎡となる。

2 野外調査の方法

座標の設定

調査区域は急斜面地と分断された狭い平場で構成されており、グリッドによる区分はそぐわない状況である。よって野外調査ではグリッド設定はおこなわず、平面直角座標のX系(世界測地系)の座標値で位置を示すこととした。調査区域をなるべく広く視準できる位置に基準点(3級基準点)を2点設置し、それを補足する位置に補点を4点設置した。各点の座標値は以下の通りである。

基準点1 (H・28NO. 1)	X = -69.615.094m	Y = 91.897.046m	Z = 5.740m
基準点2 (H・28NO. 2)	X = -69.646.275m	Y = 91.971.993m	Z = 48.076m
補・1	X = -69.610.040m	Y = 91.943.692m	Z = 17.334m
補・2	X = -69.656.923m	Y = 91.915.784m	Z = 18.645m
補・3	X = -69.612.664m	Y = 91.973.830m	Z = 34.209m
補・4	X = -69.653.116m	Y = 91.934.784m	Z = 31.509m

本報告の調査範囲は、南北X = -69.660m ~ -69.604mに、東西Y = 91.892m ~ 91.980mに納まる。

遺構の名称

調査区域内には、中世城館の構成施設として造成された平場、腰曲輪、犬走が存在する。平場、腰曲輪については施設の性格を客観的に区分できないため、一括して「平場」の呼称を用いる。

そして、個々を区分するため、検出順にアラビア数字を付し、「平場1」「平場9」というように呼称する。「犬走」は斜面に構築された幅の狭い通路状の施設である。2条検出されており「犬走1」「犬

2 野外調査の方法

走2」の呼称を用いる。また、平場2で竪穴建物が1棟検出された。これは遺構略号を用いて「S I 1」と呼称する。

粗掘り・遺構検出

本調査では城館を構成する「曲輪」「犬走」等が遺構ということになる。これらは一部を除くと現況の地表にその形状を留めており、雑物、腐葉土を取り除いた時点が遺構の検出及び完掘となる。本調査ではこの段階の遺構を10cm毎の等高線の地形図を測量し、遺構実測図とする。

この後、「曲輪」「犬走り」の面に構築された柱穴や溝などの構築物を確認するため、遺構の掘込が確認できる面まで所謂「粗掘」を行い、ジョレン等で掘削し、構築物の有無を確認した。

遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。

遺物の取り上げ

遺物は「平場」ごとに取り上げた。必要と思われる場合、座標とレベルを記録した。またそれ以外では可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

実測・写真撮影

地形測量、平面実測は電子平板（株式会社CUBIC 遺構実測支援システム）を使用して行った。また断面実測については、従来どおり、レベルを用いて水平を設定し手作業による実測を主体として行った。写真撮影は一眼レフデジタルカメラを主に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺構の完掘状況などについて行った。

3 室内整理の方法

出土遺物は水洗の後、注記を行い、接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選び出し、登録を行った。

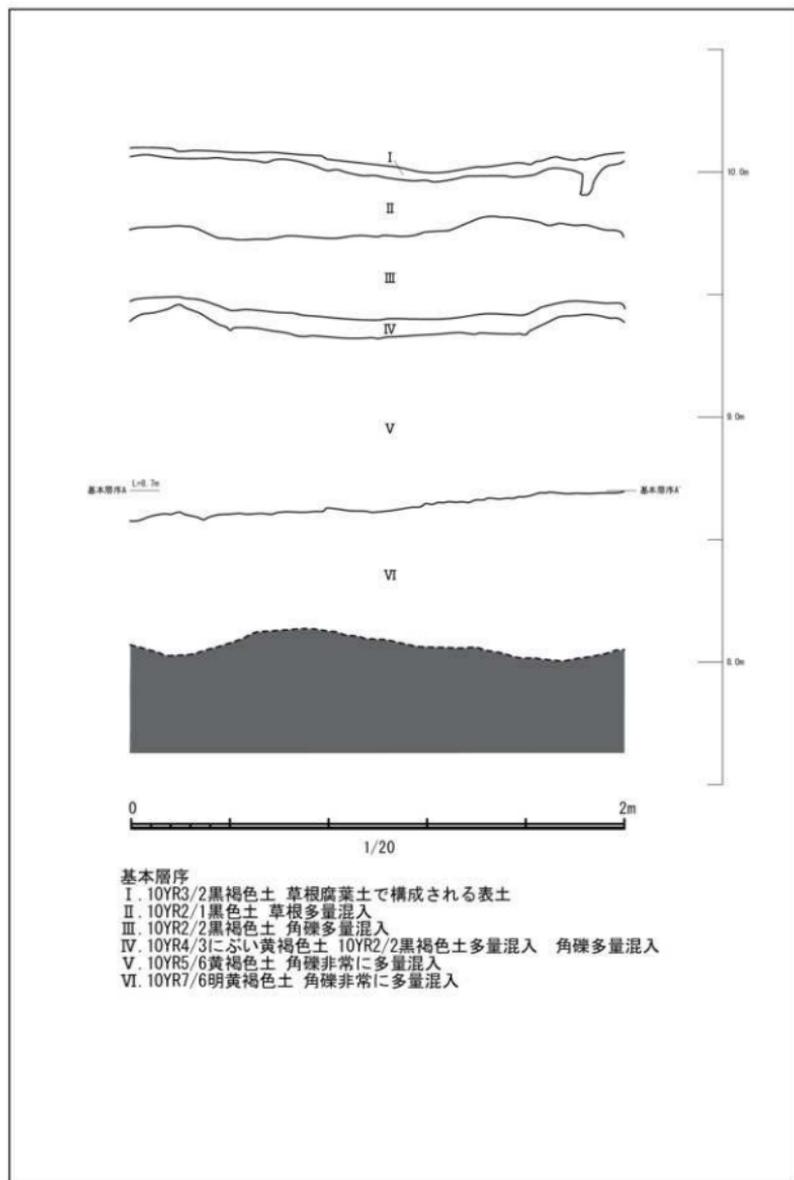
遺物実測は原則として実寸で行った。また、電子平板で実測した地形図、遺構データは点検を行い、等高線の補正、断面図の合成等を経て図版としての体裁を整えた。

野外調査で撮影したデジタル写真は台帳の作成を行い、データごとにフォルダ整理を行った。また、報告書掲載分の遺物撮影もデジタルカメラで行い、データごとに整理を行った。そして、これらのデジタル写真データから報告書掲載写真を選択し、写真図版版下を作成した。

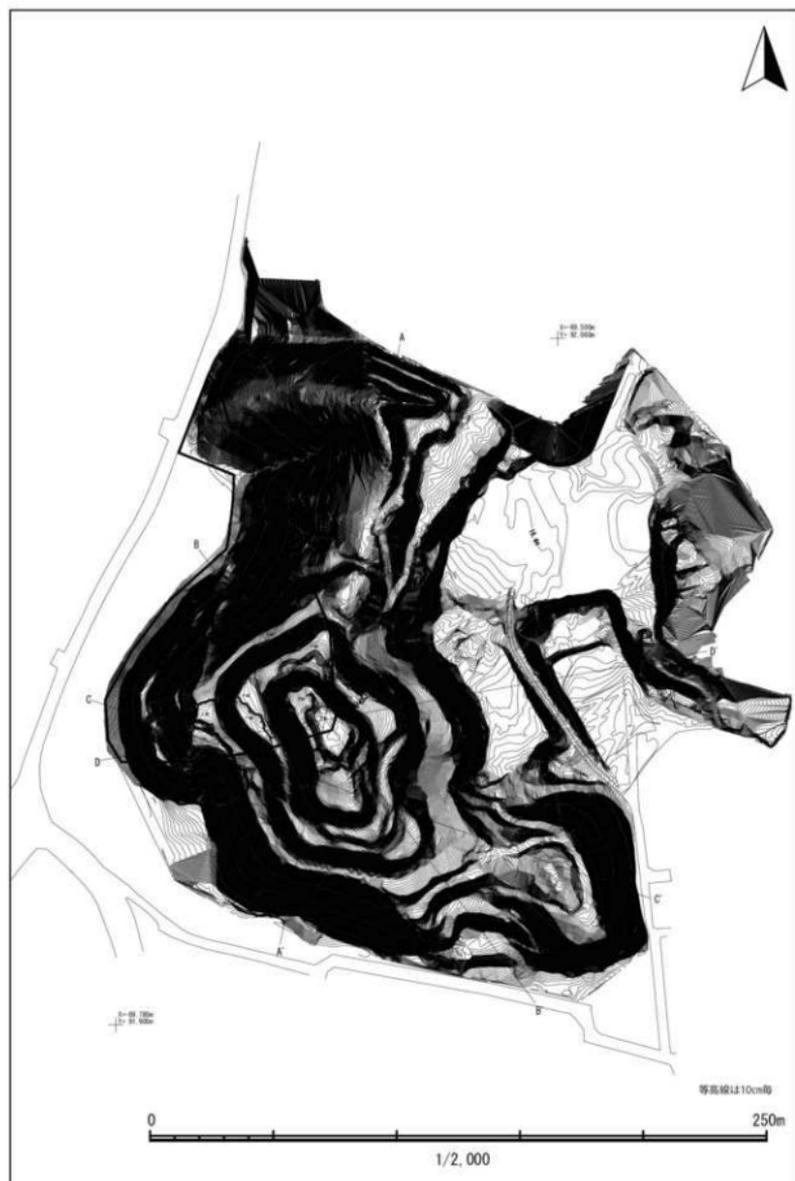
これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

4 基本土層

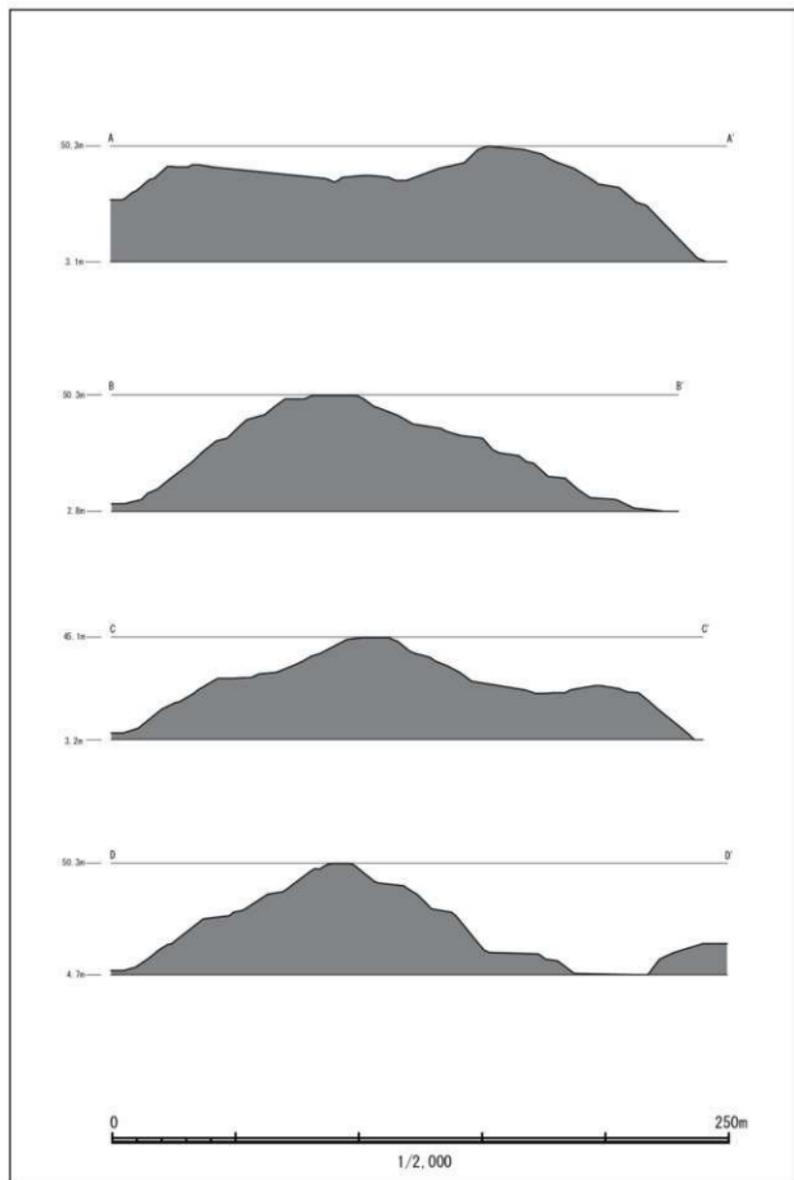
調査区は部分的に近代以降の造成土で被覆される部分もあるが、基本的には、城館構築面が直接、薄い表土に覆われている。急斜面部は、この表土も存在せず、基盤層の岩盤が直接露出する箇所も多い。ここでは、調査区域東部中ほどの、麓部分の土層を提示しておく。なお、基盤を構成する岩盤は石質鑑定の結果「頁岩 北部北上帯」との鑑定を受けている。



第3図 基本土層



第4図 扶田館全体図



第5図 扶田館全体断面図



第6図 調査区域内測量図



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

1 挾田館全体の概要（第4・5図）

挾田館跡は中世の城館跡である。挾田館跡も一般的な中世城館と違わず、自然地形の丘陵を改変し、平場や切岸、堀等を造成した言わば「土の城」である。

調査区内の遺構を報告する前に、挾田館跡全体の概観を示す。挾田館は比高44m程の山城である。南北230m、東西180m程が範囲とされている。頂部は60m×15mを測るが、段差、傾斜がみられ、平坦な面は非常に狭い空間に限定される。そして、頂部を取り囲む形で帯状の平場が二段見られる（それぞれ中段平場、下段平場とする）。この中段平場、下段平場はそれぞれが複数の平場の集合体で段差が生じており、「腰曲輪」が連なっているものと理解すべきである。頂部の北側の尾根筋には「堀切」が2ヶ所あり、頂部と北側を隔てている。そして、今回調査区の反対面に相当する城館の東側の中腹から麓には、面積の広い平場が複数個所みられ、居住用の空間であったと推測される。

2 検出遺構

遺構の概要（第6・7図）

発掘調査がおこなわれた範囲は頂部と中段平場、下段平場を含む城館の西側部分である。下段平場より下は急峻な造成された切岸で、幅の狭い通路状の「犬走」が2条横走る。そして、下段平場は調査区内では3ヶ所、中段平場は4ヶ所の腰曲輪でそれぞれ構成され、頂部は20m×10m程の狭い平場とその周囲に巡る通路状の平場で構成されており、調査範囲内の平場（腰曲輪を含む）は合計9ヶ所となる。

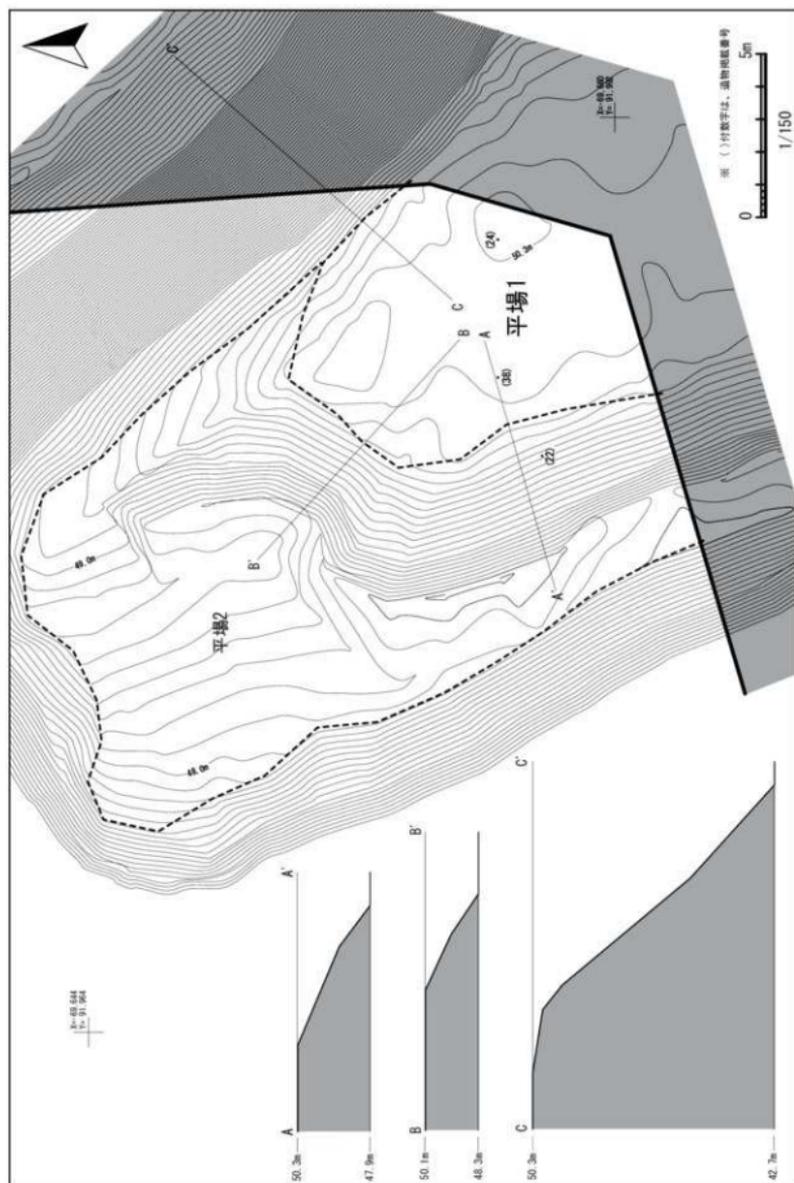
各平場、犬走の平面図は10cm毎の等高線の地形図を用いて表示する。平場は広さ、長さが均一ではなく、縮尺は1/150ないし1/300、または1/400の縮尺で示した。また、平場等の範囲は漸次標高が変化しており、実際には客観的にその範囲を示すことは困難である。しかし、図上で何らかの範囲表示がなければ、報告は非常に理解し難くなる。よって客観性は低い暫定的な表示であるが、平場、犬走を図示するにあたってその範囲を点線で囲み示す。また断面図については、傾斜の転換点が判別し易いように、意識して直線的になるように調整している。また堅穴建物は1棟検出されている。この堅穴建物S11は、平場2の大半を占める形で構築されており、図版、文章記載を平場2と連続して記載する。

平場1（第8図、写真図版9）

〔位置〕調査区南東部、X = -69,661m ~ -69,650m、Y = 91,981m ~ 91,990m付近に位置する。今回の調査区の最頂標高地点となる。

〔形態〕長径（南東～北西）約19.1m、短径（南西～北東）約11.0mの楕円の平面形を呈する。平場の南東側約2/3は調査区域外にかかる。平場全体の面積はおよそ200㎡、この内、調査区域内の面積は65.9㎡である。平場の最高標高は50.3m、最低標高は49.9mである。

〔比高等〕本平場1の西側下段には平場2が位置する。比高は約1.5～2.1m、両平場間の傾斜は約30°である。また北西側下段には、平場4から段差を有して連続する調査区外の平場（名称なし）が位置



第B区 平場1

する。比高は約7.4m、両平場間の傾斜は46°と急峻である。

〔遺物、構築物〕表土から中世の青磁碗（6）、瓦質土器の香炉？（22）、染付磁器の小杯？（24）、鉄製の奉納用宝剑（38）、寛永通寶（40）が採集された。染付磁器小杯？は端反りの器形で、産地、時期を判別できないが、19世紀～近代のものと推測される。寛永通寶（40）は銅一文銭の古寛永である。また、調査範囲内では平場上での構築物の痕跡は検出されなかった。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、扶田館の機能していた時代の遺構である。また後世の改変はなされておらず、城館時に造成された平場形態を留めていると推測される。また、近世～近代の可能性が高い奉納用の宝剑が採集されたことは、本平場上に近世～近代に社や祠が所在した可能性を示している。寛永通寶、染付磁器片も、これに伴う遺物と推測される。

〔性格〕現存する扶田館全体の中で、最高標高地点であり、南方の大槌川上流方面を警戒する物見台の機能が推測される。また、尾根筋に続く北側以外は、切岸となっており、腰曲輪としての機能も有すると推測される。

平場2（第9・10図、写真図版10）

〔位置〕調査区南東部、 $X = -69.662\text{m} \sim -69.642\text{m}$ 、 $Y = 91.970\text{m} \sim 91.987\text{m}$ 付近に位置する。今回調査区の最頂標高地点の平場1の北西に接する。平場1とともに頂部平場を構成する。

〔形態〕約8m×約9mの不整な方形の範囲と、その南西側に延びる幅2.3m、長さ約12mの通路状部分からなる。平場全体の面積は約110.5m²である。平場の最高標高は49.1m、最低標高は47.5mである。北辺、西辺はかなり崩落していると推測される。

〔比高等〕本平場2の西側下段には中段平場の平場5が位置する。比高は9.5m、両平場間の傾斜は39°である。北西側下段には、中段平場の平場4が位置する。比高は7.1m、両平場間の傾斜は41°である。また、北側下段には中段平場の平場3が位置する。比高は6.9m、両平場間の傾斜は38°である。そして、本平場の南側には平場1が位置する。比高は約1.8mである。

〔遺物、構築物〕本平場2の西側の被覆土中から青磁碗（1、2）、染付碗（15）、青磁香炉？（25）、鉄製品鍬（26、27）が出土した。また緻密には範囲から外れるが、本平場2の西端部に接する斜面の被覆土から青磁碗（3）、青磁皿（11）、鉄製品小札（28、29、30、31、32）、寛永通寶鉄一文銭（41）が出土している。また、本平場の大部分を占める形で、竪穴建物（S I 1）が構築されている。なおS I 1からも遺物が出土しているが、これらについては、S I 1の項目内で記載する。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、扶田館の機能していた時代の平場である。

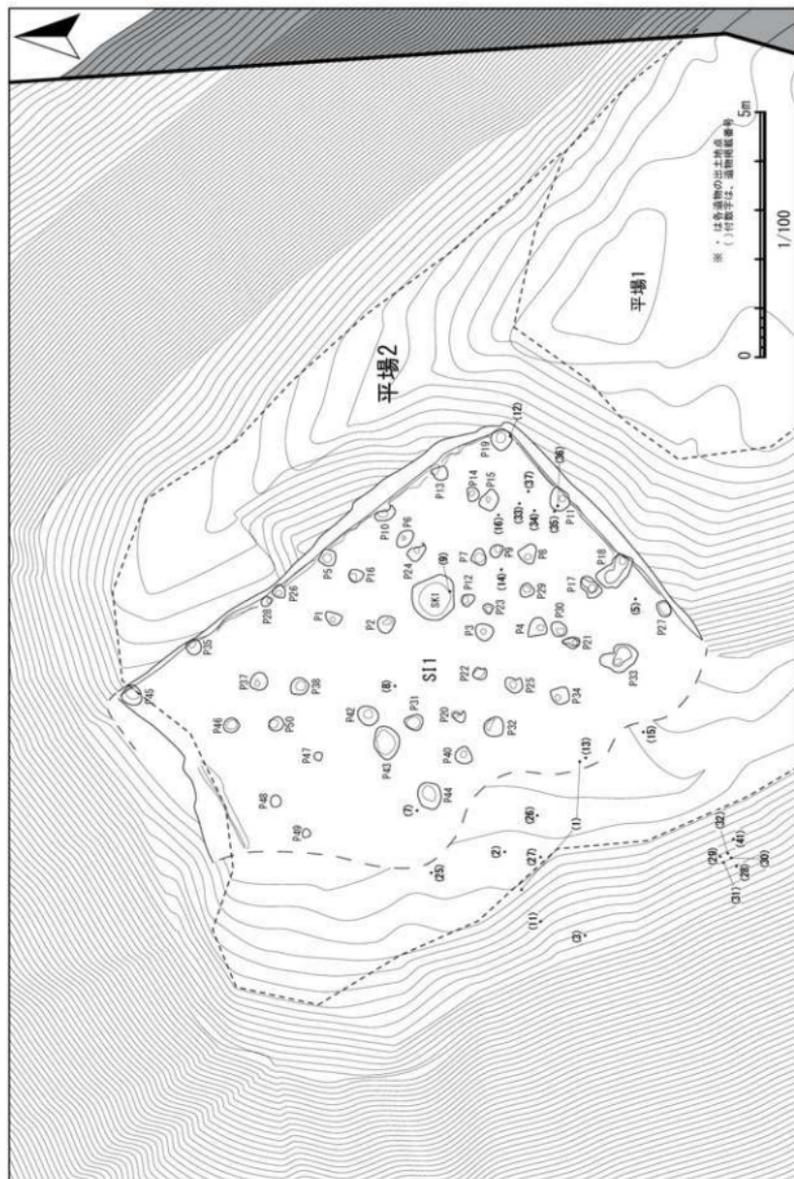
〔性格〕南西側の通路状の部分を除いて、竪穴建物S I 1のプランが占め、竪穴建物の構築のために造成された平場と理解される。

S I 1 竪穴建物（第10・11図、写真図版10・19～23）

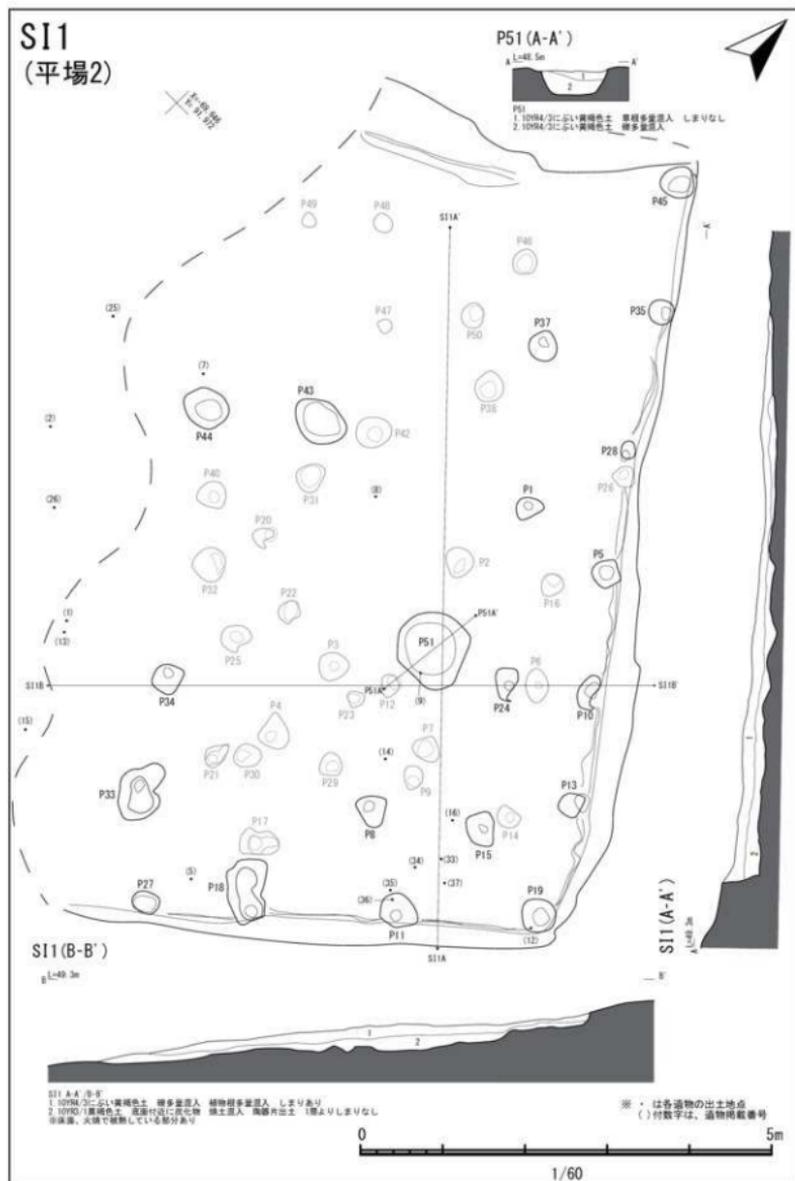
〔位置〕平場2の北側部分、 $X = -69.650\text{m} \sim -69.642\text{m}$ 、 $Y = 91.970\text{m} \sim 91.987\text{m}$ 付近に位置する。

〔形態〕北東辺の壁は97.8cm以上、南東辺の壁は60.1cm以上である。北西辺、南西辺は壁が全く残っていないので全体形は不明である。客観的根拠はないが、10m×7m程のプランと想定する。通常の中世竪穴建物の形状からすると、張出部が存在するが、本事例では検出できなかった。残存している部分の床面積は約62.8m²である。棟方向（長辺）の軸はN-38°-Wの傾きである。

〔埋土〕埋土は2層に分かれる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。2層中には炭化物、炭化した穀物？粒が混入し、竪穴の床面が被熱している部分もあり、火災で焼失した建物の可能性が推測さ



第10図 平場2、S11



第11図 SI1

れる。

〔床面・壁面〕検出された範囲の南東部分は、基盤層である頁岩の岩盤を床面としている。南西側と北西側は、床面と推測されるレベルより低くなっており、岩盤の上に土を敷いた床面が流出した状況と推測される。検出された壁面は頁岩の岩盤を削って形成されたものである。壁面が残存しない南西辺、北西辺は、土盛りで壁が構築され、その土が流出、崩落したものと推測される。埋土の項で示したとおり、床面が被熱している部分があり、火災で焼失した建物の可能性が推測される。

〔柱穴〕プラン内から約50個の柱穴状のピットが検出された。形態は柱穴に類似するが、配列を読み取れないものがかなりあり、全てが柱穴とは確定できない。北東壁際に並ぶP45、P35、P28、P5、P10、P13、P19、南東壁際に並ぶP11、P18、P27については、本堅穴建物を構成する柱穴と確実に判断できる。それぞれの柱間寸法は151.5cm(5.0尺)と読み取れる。これらに対面する壁際の並ぶ柱穴は検出されず、その部位は崩落したと判断される。また、壁際の柱穴の並びとは対応しないが、P37、P1、P24、P15の並び(柱間寸法200cm・6.6尺)、そしてP15から直角に曲がるP8、P33(柱間寸法136cm・4.5尺)の並びも認識できる。これらは、壁際の柱穴と同時存在の可能性と、堅穴建物の建て替えがあり、その前身建物の壁際の柱穴である可能性の両方が想定される。また、プラン内中央やや南東寄りに柱穴とは異なる大きさのP51が存在する。105cm×95cmのプランで深さは30cmである。埋土は2層に分かれるが、その用途、機能は不明である。

〔遺物〕本堅穴建物の埋土から青磁碗(5、7、8、9)、白磁碗(12)、染付碗(13、14)、古瀬戸花瓶(16)、鉄製品釘(33、34、35、36、37)が出土した。また、出土ポイントの記録が欠落しているが、銭貨「皇宗通寶」(39)が床面から出土している。その他、炭化材、炭化した穀物粒(粟か稗?)が埋土～床面から出土している。

〔年代〕出土遺物の年代観から、15世紀後半～16世紀前半の建物と推測される。

〔性格〕物見台と推測される調査区内最頂部の平場1に接して所在している。位置関係から、見張り要員の詰所、屯所と想定される。焼失建物と推測され、廃絶は火災によるものとも想像される。

平場3 (第12図、写真図版11)

〔位置〕X = -69.638m ~ -69.630m、Y = 91.968m ~ 91.985m付近に位置する。今回の調査区内では中段の北部で、中段の最高標高地点となる。

〔形態〕東西長約16.9m、南北長2.6m ~ 5.5mの弧状の平面形を呈する。平場の面積は61.4㎡である。平場の最高標高は43.8m、最低標高は43.0mである。

〔比高等〕本平場3の北側下段には平場4が位置する。比高は1.1 ~ 1.3m、両平場間の傾斜は約22°である。また南側上段には、平場2が位置する。比高は約5.4m、両平場間の傾斜は38°である。

〔遺物、構築物〕出土遺物、平場上での構築物の痕跡の検出はない。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、挾田館の機能していた時代の遺構である。

〔性格〕北面する平場4とは比高があり、その間の傾斜は切岸となっている。平場4に達した敵勢からの攻撃に対する防御の足場としての腰曲輪の機能を有すると推測される。

平場4 (第13図、写真図版12)

〔位置〕X = -69.646m ~ -69.619m、Y = 91.955m ~ 91.989m付近に位置する。今回の調査区の中では中段の北東部分を占める。

〔形態〕東西長34.5m、南北長4.1 ~ 9.5mの不整な弧状の平面形を呈する。平場の東端部が僅かに調



第12図 平場3

区外にかかるが、大半は調査区内に含まれる。平場全体の面積は189.6㎡である。平場の最高標高は41.7m、最低標高は38.8mである。

〔比高等〕本平場4の南側上段には平場3が位置する。比高は1.1～1.3m、両平場間の傾斜は約22～24°である。また北側下段には平場7が位置する。比高は5.9～7.7m、両平場間の傾斜は41°と急峻である。なお、平場7は下段平場に位置する。

〔遺物、構築物〕出土遺物、平場上での構築物の痕跡はない。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、挾田館の機能していた時代の遺構である。また後世の改変はなされておらず、城館時に造成された平場の形態を留めていると推測される。

〔性格〕北面する下段平場の平場7とは比高があり、その間の傾斜は切岸となっている。下段平場からの攻撃に対する防御の足場である腰曲輪の機能を有すると推測される。また、南西端部も平場5との比高を有しており、平場5からの攻撃を防ぐ足場の機能も有している。

平場5（第14図、写真図版13）

〔位置〕 $X = -69.663\text{m} \sim -69.638\text{m}$ 、 $Y = 91.950\text{m} \sim 91.966\text{m}$ 付近に位置する。今回の調査区の中では中段の南西部分を占める。

〔形態〕北西～南東長24.3m、北東～南西長2.5～8.1mの不整な台形の平面形を呈する。平場全体の面積は121.4㎡である。平場の最高標高は39.6m、最低標高は38.4mである。

〔比高等〕本平場5の北西側上段には平場4が位置する。比高は1.7m、両平場間の傾斜は13°である。南西面の下段には平場6が位置する。比高は0.7～1.1m、両平場間の傾斜は20～41°である。また、北西部下段には平場7が位置する。比高は約6.9m、両平場間の傾斜は37°である。なお、平場7は下段平場に位置する。また西側上段には平場2が位置する。比高は約9.1m、両平場間の傾斜は38°である。なお、平場2は頂部平場に位置する。

〔遺物、構築物〕表土から、中国産青磁皿（10）、古瀬戸鉢目付大皿（17、18、19、20）、産地不明陶器挿鉢（21）、が採集された。これらは西側上部の平場2から流入したものと思われる。

また、平場上での構築物の痕跡はない。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、挾田館の機能していた時代の遺構である。また後世の改変はなされておらず、城館時に造成された平場の形態を留めていると推測される。しかし、本平場の南西面に面する平場6とは、比高差が小さく、元来同一の平場であったものを、近代以降に植林等のため段差をつけて掘り込んだ可能性もある。

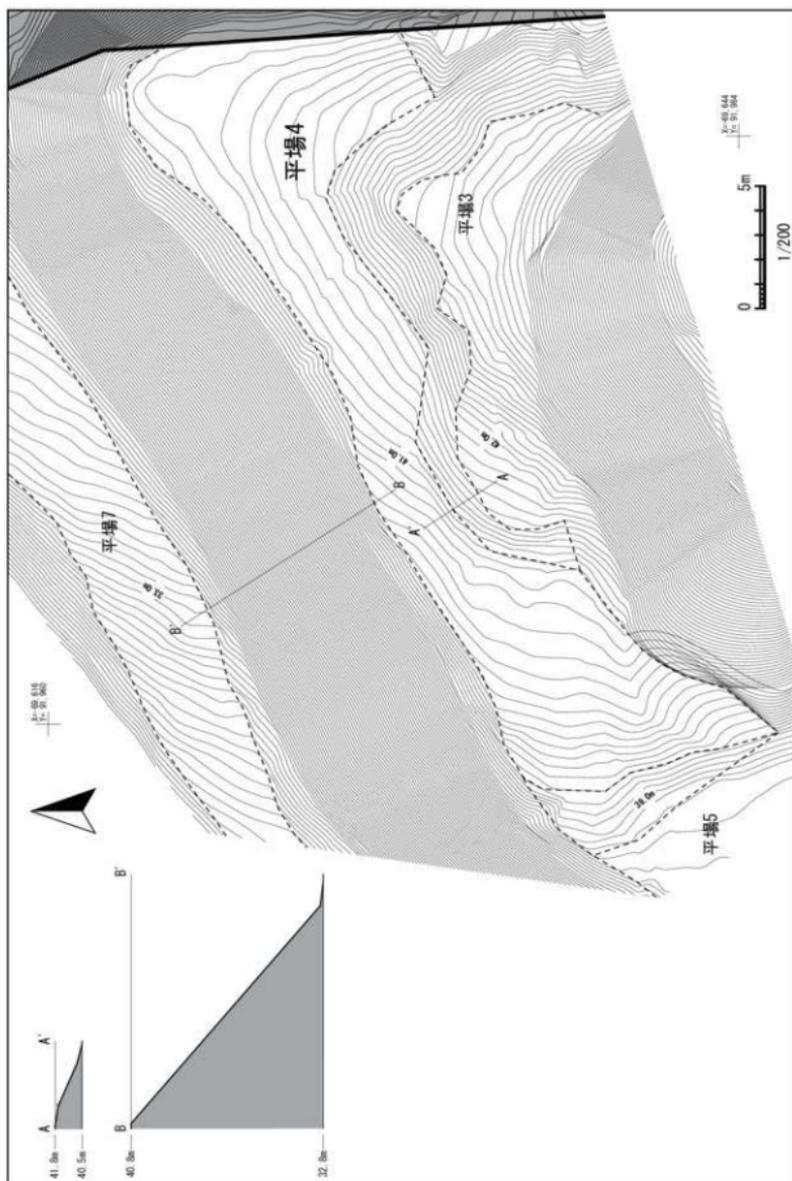
〔性格〕北西部に面する下段平場の平場7とは比高があり、その間の傾斜は切岸となっている。下段平場からの攻撃に対する防御の足場である腰曲輪の機能を有すると推測される。また、本平場の南西面に面する平場6は、上述の通り近代以降に段差がつけられた可能性もある。

平場6（第15図、写真図版14）

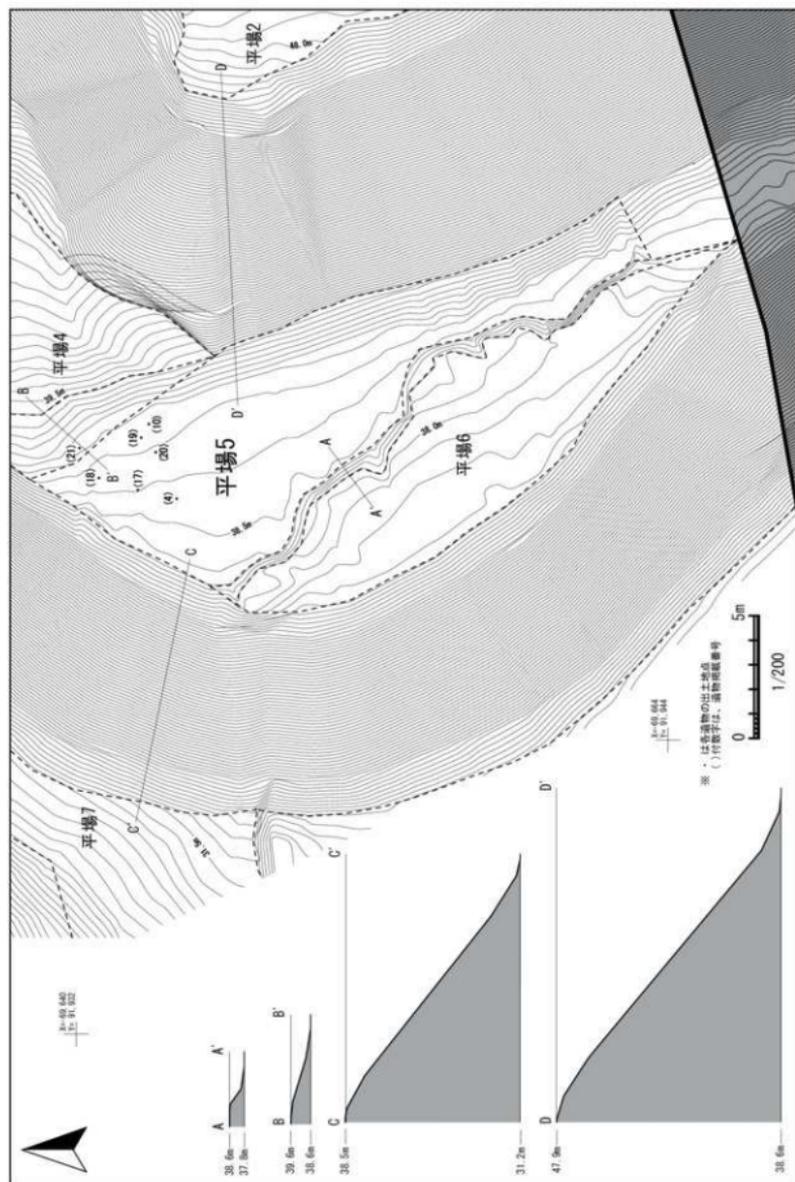
〔位置〕 $X = -69.667\text{m} \sim -69.646\text{m}$ 、 $Y = 91.949\text{m} \sim 91.964\text{m}$ 付近に位置する。今回の調査区の中では中段の南西端を占める。

〔形態〕北西～南東長24.6m、北東～南西長0.9～6.1mの弧状を呈する。平場全体の面積は88.3㎡である。平場の最高標高は38.2m、最低標高は37.7mである。

〔比高等〕本平場6の西側下段には平場8が位置する。比高は6.3～6.6m、両平場間の傾斜は36°である。北西端の下段には平場7が位置する。比高は5.8m、両平場間の傾斜は35°である。平場7、平場



第13図 平場4



第14図 平場5

8は下段を構成する平場である。また、北東辺上段には平場5が位置する。比高は0.7～1.1m、両平場間の傾斜は20～41°である。

〔遺物、構築物〕出土遺物はなかった。また、平場上での構築物の痕跡はない。

〔年代〕本平場の北東辺に面する平場5とは、比高差が小さく、元来同一の平場であったものを、近代以降に植林等のため段差をつけて掘り込んだ可能性もある。よって、本平場は城館期の形態を保持していない可能性がある。

〔性格〕本平場の北東辺に面する平場5とは、上述の通り近代以降に段差がつけられた可能性もある。しかし改変されていたとしても、下段からの進入を防ぐ足場としての腰曲輪の機能を有する面がベースになっていると理解される。

平場7（第16図、写真図版15）

〔位置〕X = -69.605m～-69.649m、Y = 91.932m～91.985m付近に位置する。今回の調査区の中では下段の北西部分を占める。

〔形態〕東西長62.5m、南北幅2.2～9.9mの帯状の平面形を呈する。平場全体の面積は265.9㎡である。平場の最高標高は35.9m、最低標高は29.9mである。

〔比高等〕本平場7の南西部上段には平場5が位置する。比高は7.5m、両平場間の傾斜は約41°である。北東部上段には平場4が位置する。比高は約5.9～7.7m、両平場間の傾斜は41°と急峻である。なお、平場4、平場5は中段平場に位置する。また、南西部の下段には「犬走1」が位置する。比高は13.9～15.3m、両間の傾斜は38～41°である。さらに、南西端の下段には「犬走2」が位置する。比高は約4.4m、両間の傾斜は35°である。そして、北東部の下段はそのまま館の麓に面する。麓までの比高は25.1m、傾斜は約38°となる。また、下段平場の中で南側に連なる平場8とは、比高0.3～0.7m、平場間の傾斜は25～45°となる。

〔遺物、構築物〕出土遺物はなかった。また、平場上での構築物の痕跡はない。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、挾田館の機能していた時代の遺構である。また後世の改変はなされておらず、城館時に造成された平場の形態を留めていると推測される。

〔性格〕北西側の面は麓から続く切岸であり、麓からの攻撃に対する防御の足場である腰曲輪の機能を有すると推測される。また、帯状の細長い形態であり、戦闘の際、防御側の通路としても機能したと解釈される。

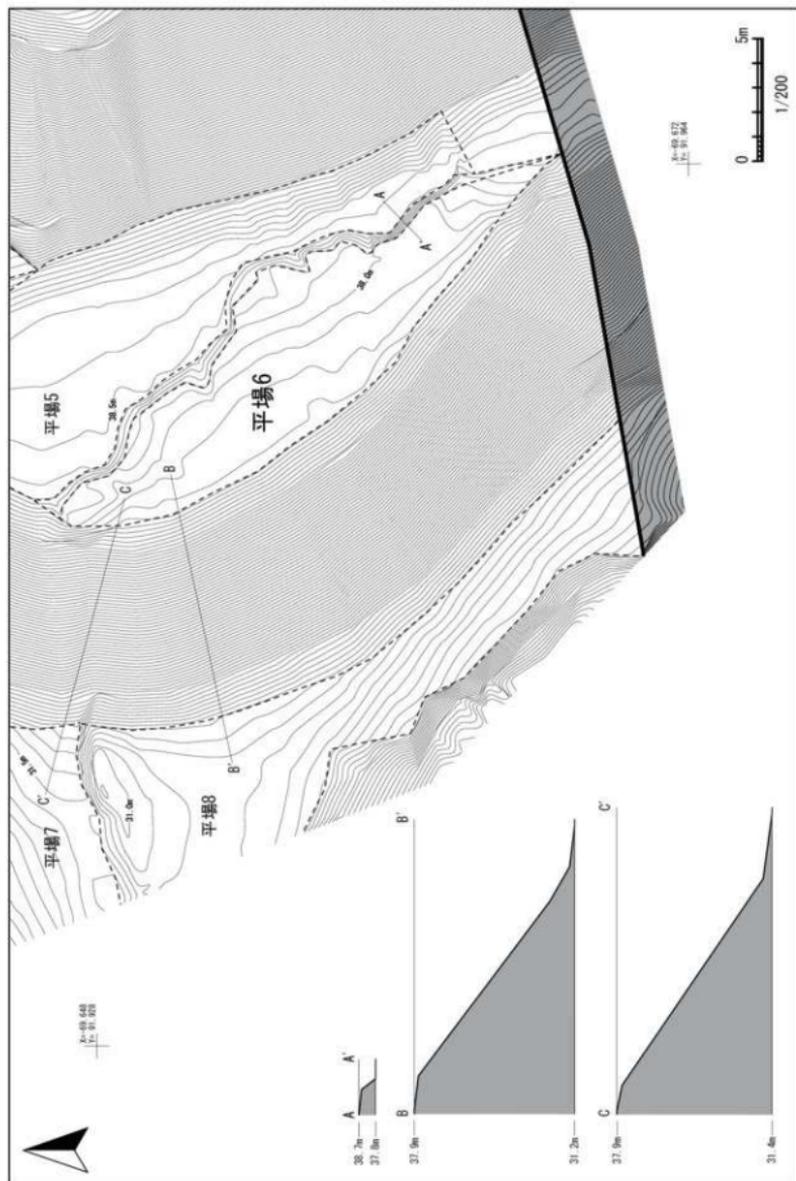
平場8（第17図、写真図版16）

〔位置〕X = -69.670m～-69.647m、Y = 91.933m～91.954m付近に位置する。今回の調査区の中では下段の南西部分を占める。

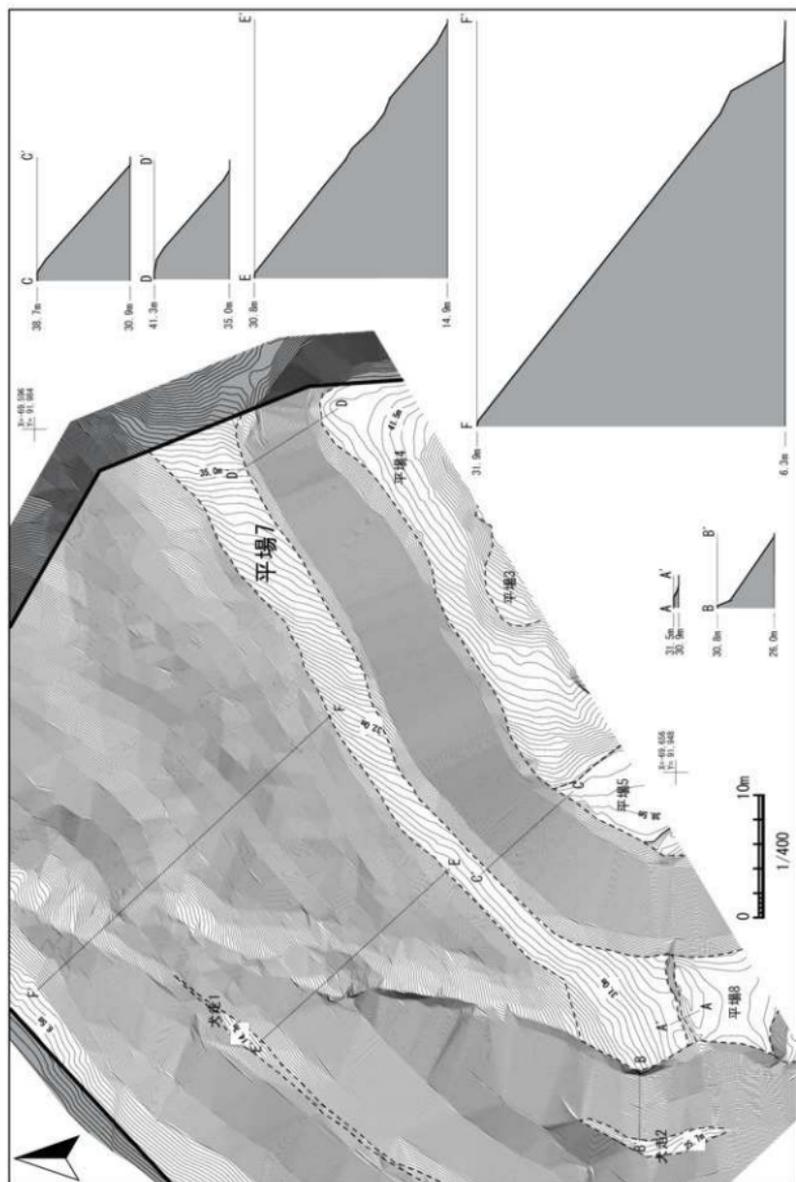
〔形態〕北西～南東長25.6m、北東～南西幅2.9～7.3mの帯状の平面形を呈する。南東端部が僅かに調査区外にはみ出すが、平場全体の面積は113.8㎡である。平場の最高標高は31.4m、最低標高は30.1mである。

〔比高等〕本平場8の北西部上段には平場6が位置する。比高は6.3～6.6m、両平場間の傾斜は約36°である。平場6は中段平場に位置する。また、北西端の下段には「犬走2」が位置する。比高は5.9m、両間の傾斜は39°である。また、下段平場の中で北側に連なる平場7とは、比高0.3～0.7m、平場間の傾斜は25～45°、南辺に連なる平場9とは比高2.2～2.4m、平場間の傾斜は21～39°となる。

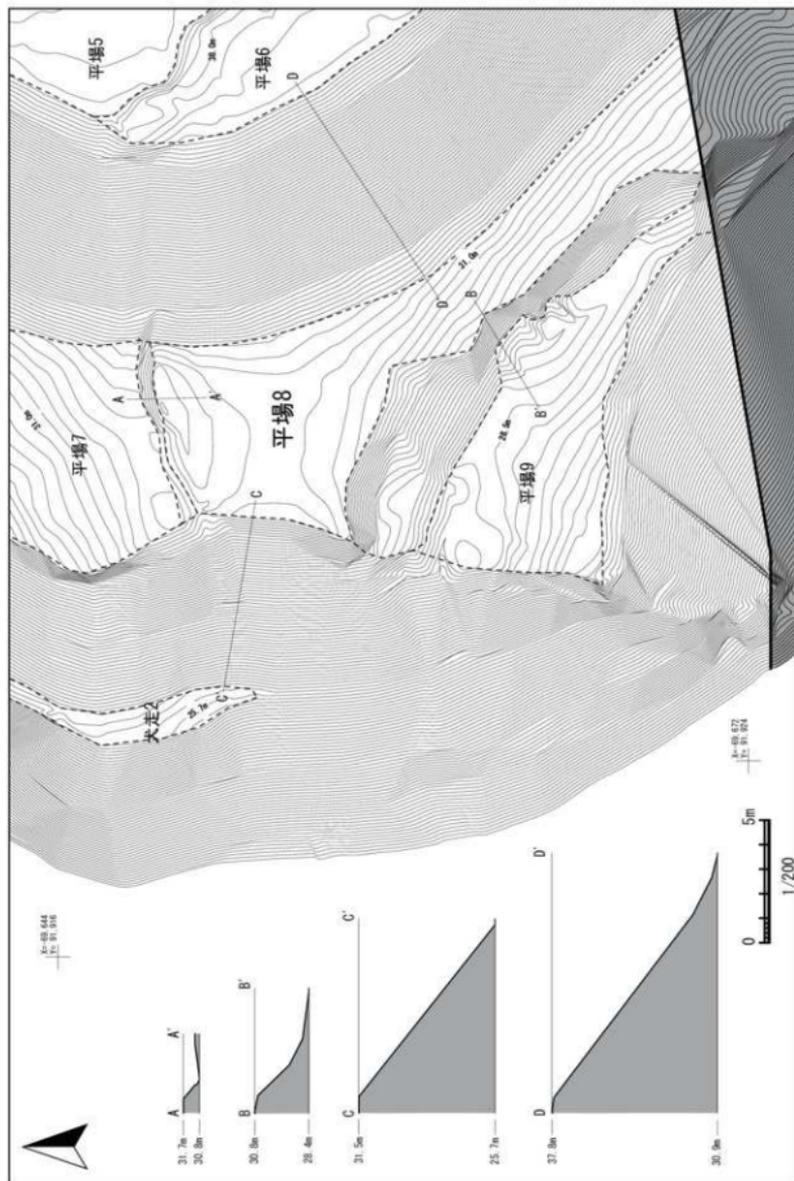
〔遺物、構築物〕表土から近世（1690～1780年）の肥前産磁器染付碗の破片（23）が収集された。ま



第15图 平場6



第16図 平場7



第17図 平場8

た、平場上での構築物の痕跡はない。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、扶田館の機能していた時代の遺構である。また後世の変更はなされておらず、城館時に造成された平場の形態を留めていると推測される。近世の肥前産染付碗は表採品であり、本平場の構築年代とは直接関係しない。

〔性格〕北西端の下面は麓から続く切岸及び犬走り2であり、麓からの攻撃に対する防御の足場である腰曲輪の機能を有すると推測される。また、南面下段の平場9からの攻撃に対する、腰曲輪としての機能も有している。

平場9（第18図、写真図版17）

〔位置〕 $X = -69,671\text{m} \sim -69,658\text{m}$ 、 $Y = 91,931\text{m} \sim 91,948\text{m}$ 付近に位置する。今回の調査区の中では下段の南西端を占める。

〔形態〕東西長19.9m、北東～南北幅0.9～7.3mの弧状の平面形を呈する。南東端部が僅かに調査区外にはみ出すが、平場全体の面積は71.4㎡である。南側は崩落していることが明瞭に観て取れ、元来は現況より面積が広がったと理解される。平場の最高標高は29.9m、最低標高は27.5mである。

〔比高等〕本平場9の西端の下段には「犬走1」が位置する。比高は10.2m、両間の傾斜は35～40°である。また、下段平場の中で北側に連なる平場8とは比高2.2～2.4m、平場間の傾斜は21～39°となる。

〔遺物、構築物〕表土から昭和12年の桐一銭銅貨（42）が採集された。また、平場上での構築物の痕跡はない。

〔年代〕城館を構成する施設と判断され、扶田館の機能していた時代の遺構である。南側が崩落しているが、残存部分では後世の変更はなされておらず、城館時に造成された平場の形態を留めていると推測される。

〔性格〕西面及び南面の下面は麓から続く切岸及び犬走1であり、麓からの攻撃に対する防御の足場である腰曲輪の機能を有すると推測される。

犬走1（第19図、写真図版18）

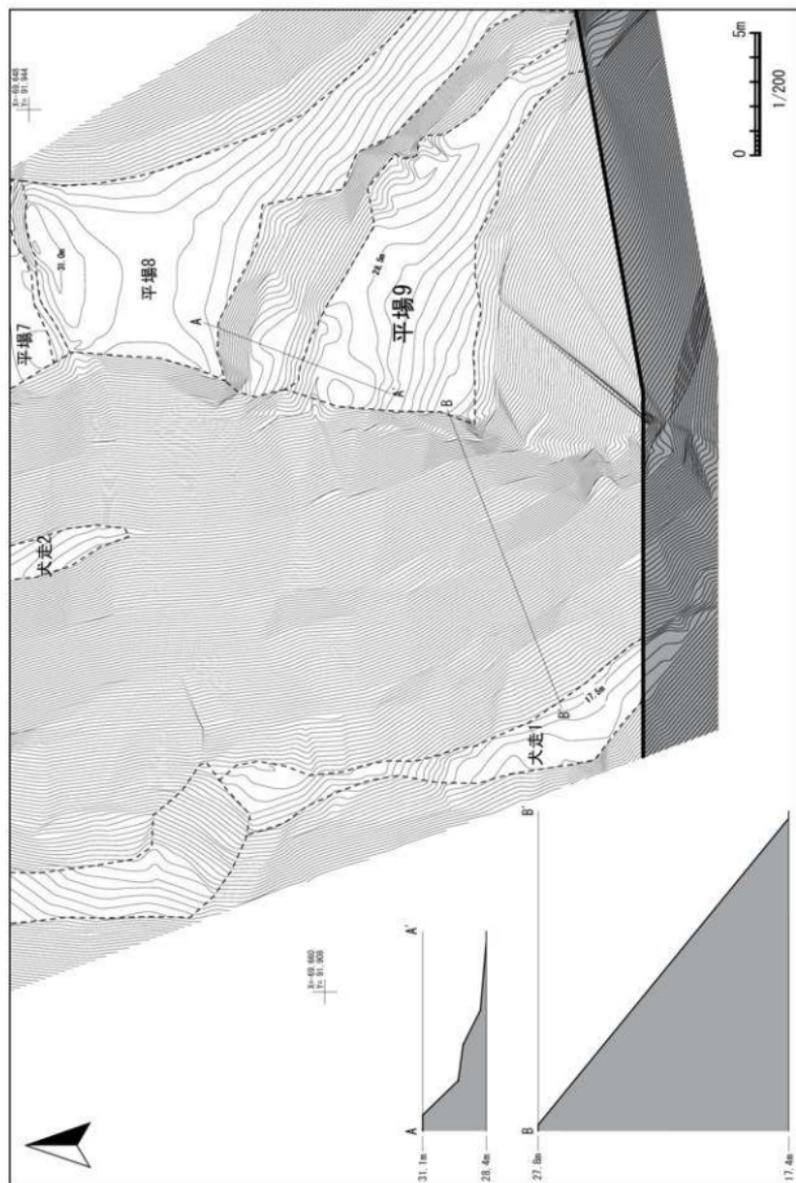
〔位置〕調査区全体の中の南西部、 $X = -69,678\text{m} \sim -69,607\text{m}$ 、 $Y = 91,911\text{m} \sim 91,939\text{m}$ 付近に位置する。

〔形態〕全長（南北長）約81.2m、幅（東西長）約0.2～2.9mの等高線に沿った通路状の平面形を呈する。南部で段差が付く部位があるが、一体の犬走として扱った。面積は109.9㎡である。最高標高は18.7m、最低標高は14.5mである。中央部の標高が高く、北側と南側へ、それぞれに行くにしたがい標高を減ずる傾向にある。

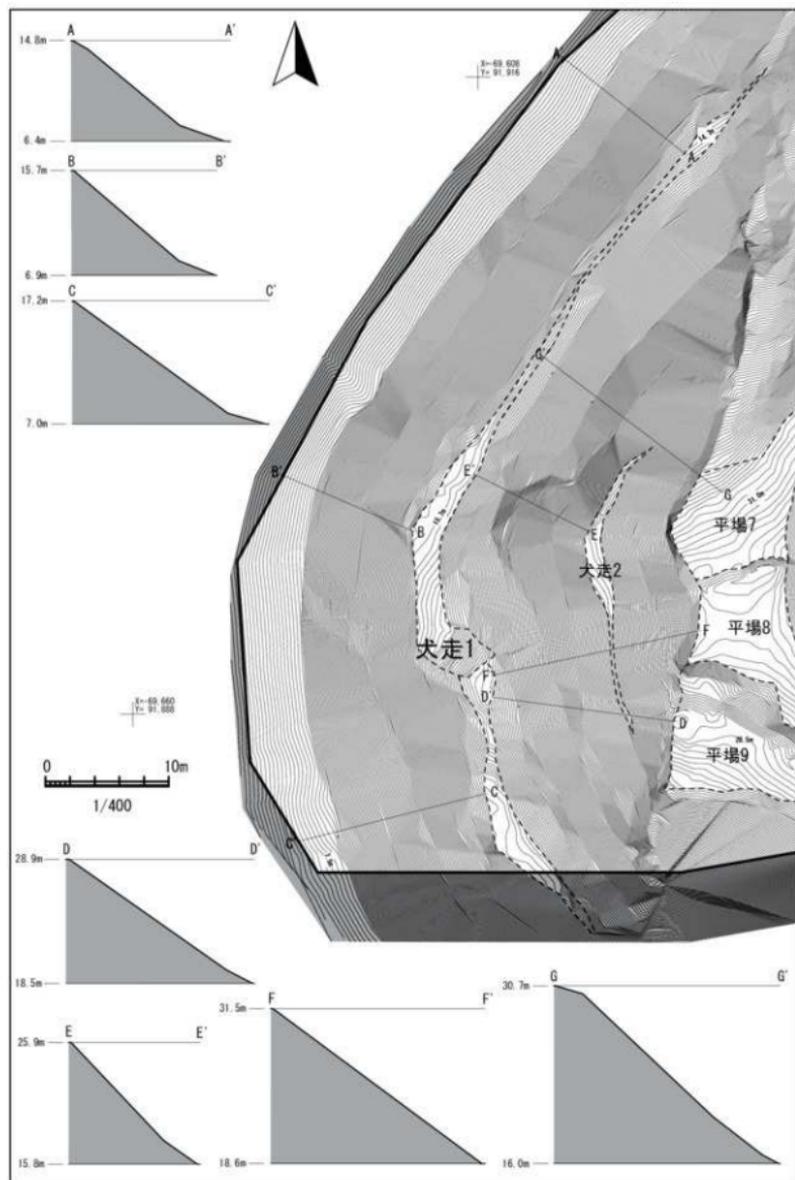
〔比高等〕本犬走1の南半部の東側上段には犬走2が位置する。比高は9.9m、両間の傾斜は45°である。また、本犬走1の北半部の東側上段は下段平場の平場7が位置する。比高は13.9～15.3m、両間の傾斜は38～41°である。また、同じく下段平場の平場8とは比高は12.5m、両間の傾斜は38°である。同じく下段平場の平場9とは比高は10.3m、両間の傾斜は35～40°である。城館の麓からの比高は8.1～10.0m、両間の傾斜は32°～36°である。

〔遺物、構築物〕出土遺物、犬走上での城館時に係る構築物の痕跡は検出されなかった。

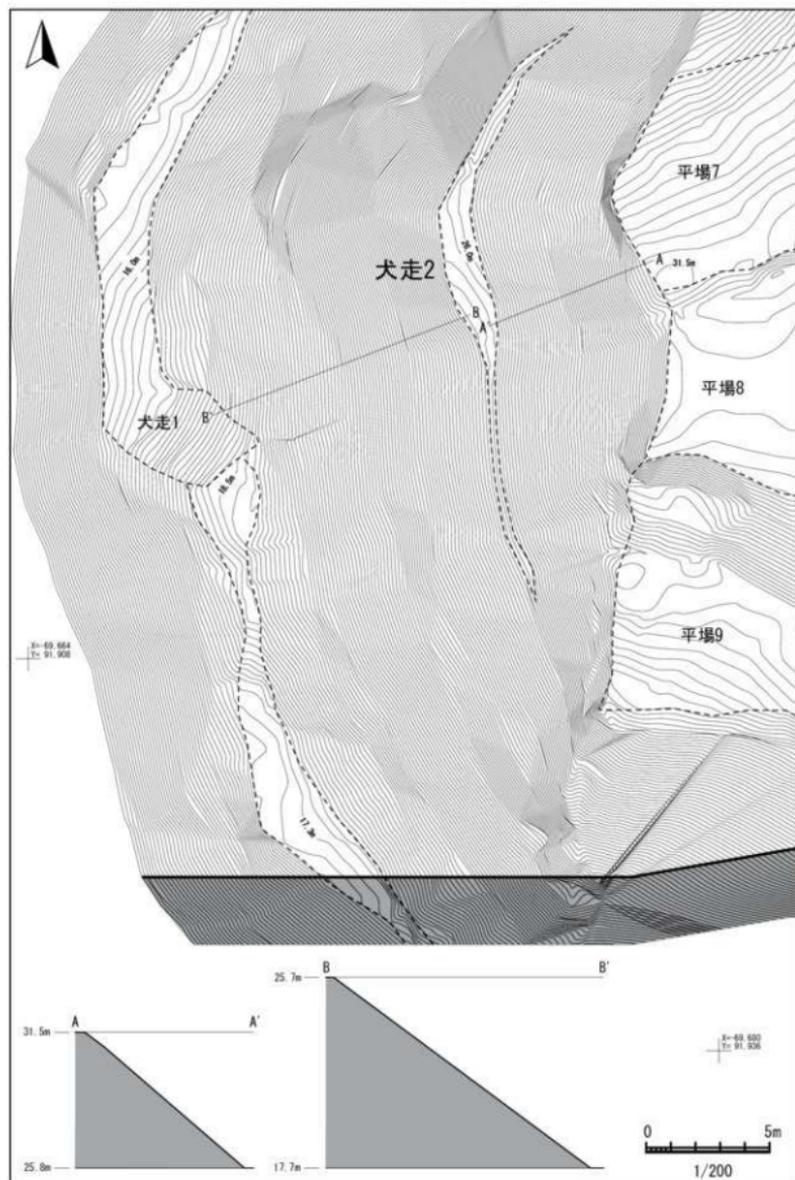
〔性格〕急峻な斜面上に築かれた幅の狭い通路状の平場であり、犬走と推測される。



第18図 平場⑨



第19図 犬走1



第20図 犬走2

犬走2（第20図、写真図版18）

〔位置〕調査区全体の中の南西部、 $X = -69,662\text{m} \sim -69,638\text{m}$ 、 $Y = 91,925\text{m} \sim 91,930\text{m}$ 付近に位置する。

〔形態〕全長（南北長）約25.1m、幅（東西長）約0.2～1.3mの等高線に沿った通路状の平面形を呈する。面積は15.8㎡である。最高標高は26.1m、最低標高は25.6mである。北側の標高が高く、南側に行くに従い標高を減ずる傾向にある。

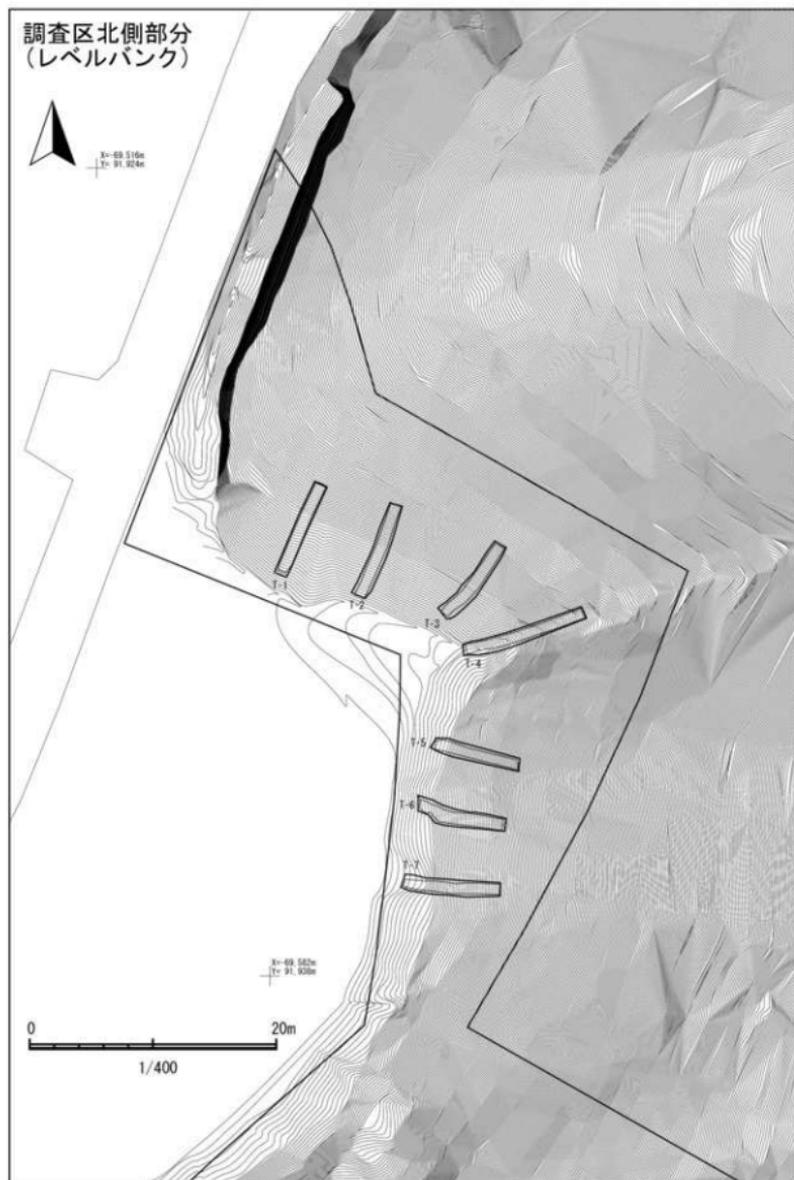
〔比高等〕本犬走2の西側下段には犬走1が位置する。比高は15.3m、両間の傾斜は36°である。また、本犬走2の東側上段は下段平場の平場7が位置する。比高は6.3m、両間の傾斜は40°である。

〔遺物、構築物〕出土遺物、犬走上での城館時に係る構築物の痕跡は検出されなかった。

〔性格〕急峻な斜面上に築かれた幅の狭い通路状の平場であり、犬走と推測される。

調査区北側部分の状況（第21図、写真図版24）

調査区北側部分のレベルバンク構築部分については、雑物除去後に人為的な平場等の有無を確認したが、その痕跡を見いだせなかった。また、トレンチを7本設置し、掘削をおこなったが、埋没している遺構も確認できなかった。人為的な造成がなくとも、挾田館を構成する山体の一部であり、10cm毎の等高線の地形図を作成し記録保存をおこなった。



第21図 調査区北側部分 (レベルバンク)

3 出土遺物

遺物の概要 (第22～24図、写真図版4・28～30)

今回の調査で出土した遺物は、陶磁器(瓦質製品含む)25点、鉄製品13点、銭貨4点がある。この内、陶磁器は中世の中国産青磁碗9点(1～9)、中国産青磁皿2点(10、11)、中国産白磁碗1点(12)、中国産染付碗3点(13～15)、瀬戸産陶器花瓶1点(16)、瀬戸産陶器卸目付大皿4点(17～20)がある。また、中世の可能性の高い産地不明瑠鉢1点(21)もある。この他、産地、時期不詳の瓦質製品香炉?1点(22)、近世の肥前産染付碗1点(23)、近世以降と推測される染付小杯?1点(24)、近世と推測する肥前産?青磁香炉1点(25)がある。陶磁器の点数は同一個体と判断される破片も、接合しないものは、それぞれを1点としてカウントしている。

鉄製品は、中世に属すると推測される鐵2点(26、27)、小札5点(28～32)、釘5点(33～37)がある。この他、図化しなかった釘と推測される微細な鉄片が数点ある。また、この他に近世～近代と推測される奉納用の宝剣1点(38)がある。銭貨は中世に属する「皇宗通寶」1点(39)、近世の「寛永通寶」銅一文銭1点(40)、「寛永通寶」鉄一文銭1点(41)、昭和12年の一銭銅貨1点(42)がある。

中世の遺物の大半は平場2に位置するS I 1とその周辺から出土している。平場5でも中世陶磁器出土のまとまりがあるが、これは、東側上方の平場2から、土とともに崩落してきたものと理解すべき出土状況であり、元来は平場2ないしS I 1に伴う陶磁器と考えられる。これらの中世陶磁器の年代観をみると15世紀後半から16世紀前半にまとまりがあり、S I 1(平場2)の機能した年代は15世紀後半から16世紀前半と想定される。この年代が城館としての挾田館の機能した年代を示すことは確実であるが、あくまで、S I 1の年代観を示すものであり、挾田館の存続年代全てを示すものではないことを留意しなければならない。また、今回の調査区からは、中世(15～16世紀)以外にも近世、近代の遺物が出土しており、城館廃絶後も、土地利用がなされていたことも明らかである。

以下、それぞれの遺物の属性、特記事項等については、表で報告する。

第2表 陶磁器観察表 (第22・23図、写真図版4・28・29)

番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			重量(g)	産地	製造年代
				口径	器高	底径			
1	青磁	碗	平場2西部被覆土	13.4	7.2	3.9	73.4	中国	15c
				軸オリーブ色を呈する 丸彫の沈線による幅広の蓮弁文 高台内面の途中まで軸がかかる					
2	青磁	碗	平場2西部被覆土	—	(4.6)	—	15.2	中国	15c
				接合しないが1と同一個体 胎土灰色					
3	青磁	碗	平場2の西斜面被覆土	—	(2.3)	—	3.6	中国	15c
				接合しないが1と同一個体 胎土灰色					
4	青磁	碗	平場5表土	—	(2.4)	—	9.0	中国	15c
				印花人物文碗と思われる 外面オリーブ色の自然釉 二次被熱している					
5	青磁	碗	S I 1埋土	—	(2.0)	—	12.9	中国	15c～16c
				腰部破片 細線の幅が狭い蓮弁文 見込みに花卉の沈線					
6	青磁	碗	平場1表土	—	(2.4)	—	3.7	中国	15c～16c
				細片であるが蓮弁文がみえない					
7	青磁	碗	S I 1埋土	—	(1.8)	—	7.7	中国	15c～16c
				腰部破片 蓮弁文は観察できない 軸はオリーブ色を呈する。					

3 出土遺物

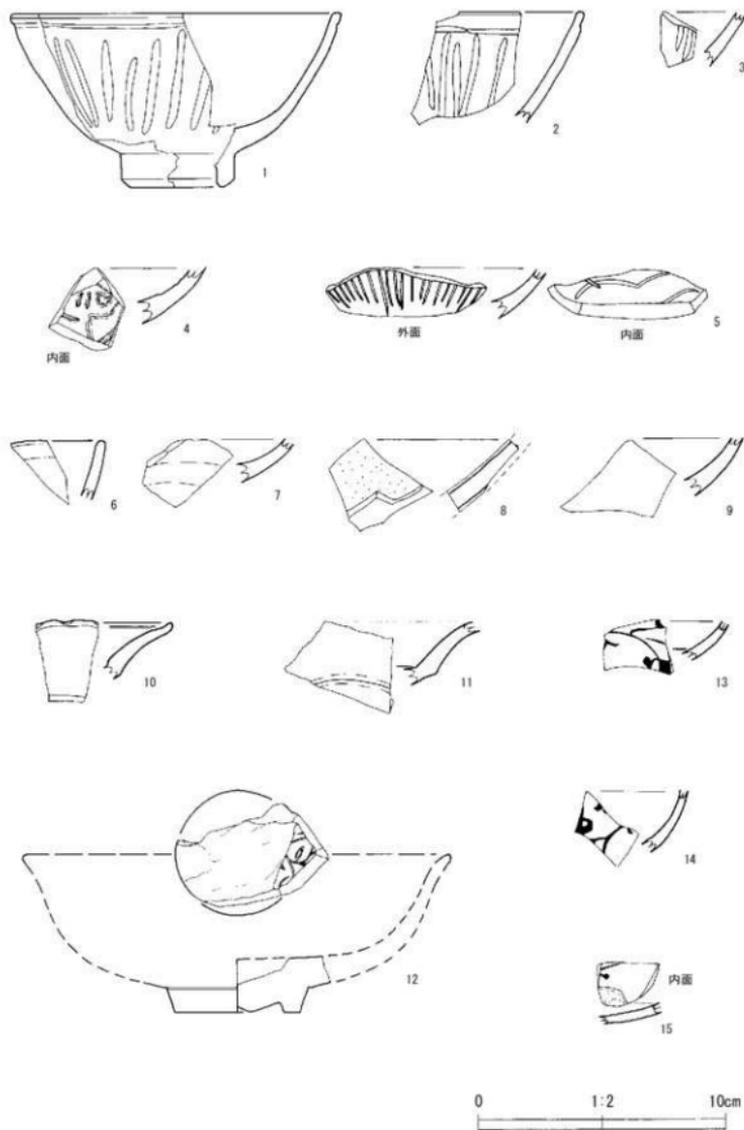
番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	産地	製造年代
				口径	器高	底径			
8	青磁	碗	S I 1 埋土	—	(2.9)	—	11.3	中国	15c ~ 16c
	体部下半破片 軸は緑灰色で分厚い 胎土灰白色								
9	青磁	碗	S I 1 埋土	—	(2.3)	—	9.0	中国	15c ~ 16c
	体部下半片 軸はオリーブ色を呈する 7 と同一個体の可能性がある								
10	青磁	皿	平場5表土	—	(2.4)	—	8.0	中国	15c ~ 16c
	花文稜花皿か 二次被熱しているか								
11	青磁	皿	平場2の西斜面被覆土	—	(2.6)	—	12.4	中国	15c ~ 16c
	花文稜花皿か 軸はオリーブ褐色を呈し発色がかなり悪い								
12	白磁	碗	S I 1 埋土	—	(2.3)	5.0	41.7	中国	15c
	高台露胎土 見込は平坦で細い沈線で花文?を描く 端反の碗と推測する								
13	染付	碗	S I 1 埋土	—	(1.7)	—	4.0	中国	15c ~ 16c
	体部下半片 外面唐草文 見込に圈線 二次被熱している								
14	染付	碗	S I 1 埋土	—	(2.4)	—	3.1	中国	15c ~ 16c
	13 と同一個体か 体部片 外面唐草文 二次被熱している								
15	染付	碗	平場2被覆土	—	(0.7)	—	3.7	中国	16c か
	底部片 見込中央に染付文 細片で文様不明 二次被熱している								
16	陶器	花瓶	S I 1 埋土	—	(4.3)	—	16.8	瀬戸	15c 前半
	古瀬戸後期様式 I 期か II 期 口縁部片 内外面灰軸 内面口縁部より下露胎								
17	陶器	卸目付 大皿	平場5表土	—	(1.1)	—	7.0	瀬戸	15c 中～ 後半
	古瀬戸後期様式 IV 期古段階 口縁部片 内外面灰軸 口唇内面に突起あり 二次被熱している								
18	陶器	卸目付 大皿	平場5表土	—	(2.0)	—	7.6	瀬戸	15c 中～ 後半
	古瀬戸後期様式 IV 期古段階 体部片 内外面灰軸 二次被熱している 確定できないが 17 と同一個体の可能性あり								
19	陶器	卸目付 大皿	平場5表土	—	(3.2)	—	14.1	瀬戸	15c 中～ 後半
	古瀬戸後期様式 IV 期古段階 体部下半片 内外面上部灰軸、下部露胎								
20	陶器	卸目付 大皿	平場5表土	—	(1.9)	—	8.4	瀬戸	15c 中～ 後半
	古瀬戸後期様式 IV 期古段階 体部下半片 内外面露胎 内面卸目 底辺部の稜は不明瞭な器形と推測される								
21	陶器	播鉢	平場5表土	—	(2.0)	—	11.7	不明	15 ~ 16c ?
	産地、時期確定できず 内外面鉄軸 内面卸目 卸目の縁は細い								
22	瓦質	香炉?	平場1表土	—	(3.6)	—	18.7	不明	中世か
	素焼きの製品 器種、時期、産地不明								
23	染付	碗	平場8表土	—	(3.3)	—	13.8	肥前	1690 ~ 1780
	近世 (1690 ~ 1780 年) の肥前産染付碗 外面草花文								
24	染付	小杯?	平場1表土	—	(3.0)	—	4.1	肥前?	19c 以降?
	端反りの器形 小杯か 焼継痕らしき痕跡がある 二次被熱している。19 以降か								
25	青磁	香炉?	平場2被覆土	—	(3.4)	—	12.0	肥前?	近世か
	中世では当てはまる器形のもの見いだせず 近世の肥前産青磁か 軸の発色悪い								

第3表 金属製品観察表 (第23・24図、写真図版29・30)

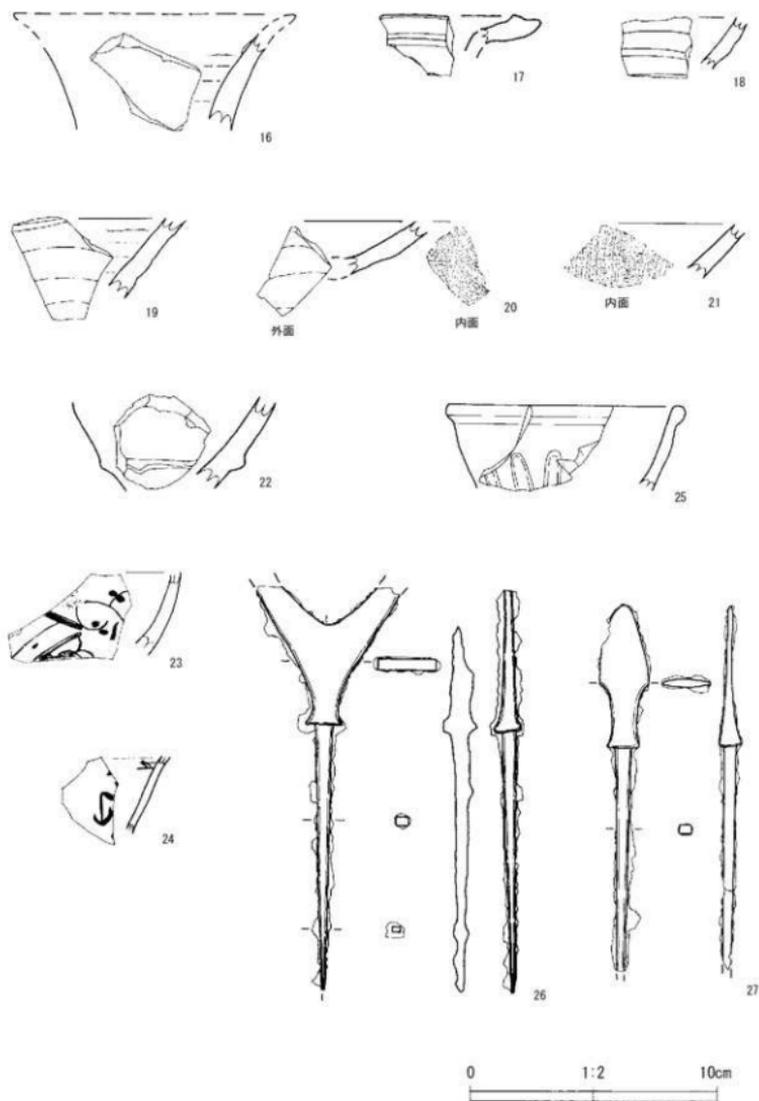
番号	種別	種類	出土位置	法量(cm)			年代
				長さ	幅	厚さ	
26	鉄製品	鐵	平場2被覆土	16.5	5.9	1.1	15~16cか
	雁股鐵 先端部欠損						
27	鉄製品	鐵	平場2被覆土	(15.1)	2.0	0.9	15~16cか
	柳葉形の鐵						
28	鉄製品	小札	平場2の西斜面被覆土	7.8	1.9	0.2	15~16cか
	完存品 穴左側7個、右側7個						
29	鉄製品	小札	平場2の西斜面被覆土	(5.5)	1.9	0.15	15~16cか
	欠損品 穴左側5個、右側5個残存						
30	鉄製品	小札	平場2の西斜面被覆土	7.7	2.1	0.2	15~16cか
	完存品 穴左側6個、右側7個						
31	鉄製品	小札	平場2の西斜面被覆土	7.7	1.9	0.2	15~16cか
	完存品 穴左側6個、右側7個						
32	鉄製品	小札	平場2の西斜面被覆土	7.6	2.0	0.25	15~16cか
	完存品 穴左側6個、右側7個						
33	鉄製品	釘	S I I埋土	(5.9)	1.2	0.4	15~16cか
	重さ9.5g						
34	鉄製品	釘	S I I埋土	(5.4)	1.0	0.6	15~16cか
	重さ11.1g						
35	鉄製品	釘	S I I埋土	(5.4)	1.1	0.4	15~16cか
	重さ9.7g						
36	鉄製品	釘	S I I埋土	7.0	0.7	0.4	15~16cか
	重さ9.5g						
37	鉄製品	釘	S I I埋土	5.2	0.9	0.4	15~16cか
	重さ8.0g						
38	鉄製品	宝剣	平場1表土	17.5	2.5	0.3	近世以降
	奉納用の宝剣 近世以降のものか 重さ44.3g						

第4表 銭貨観察表 (第23図、写真図版30)

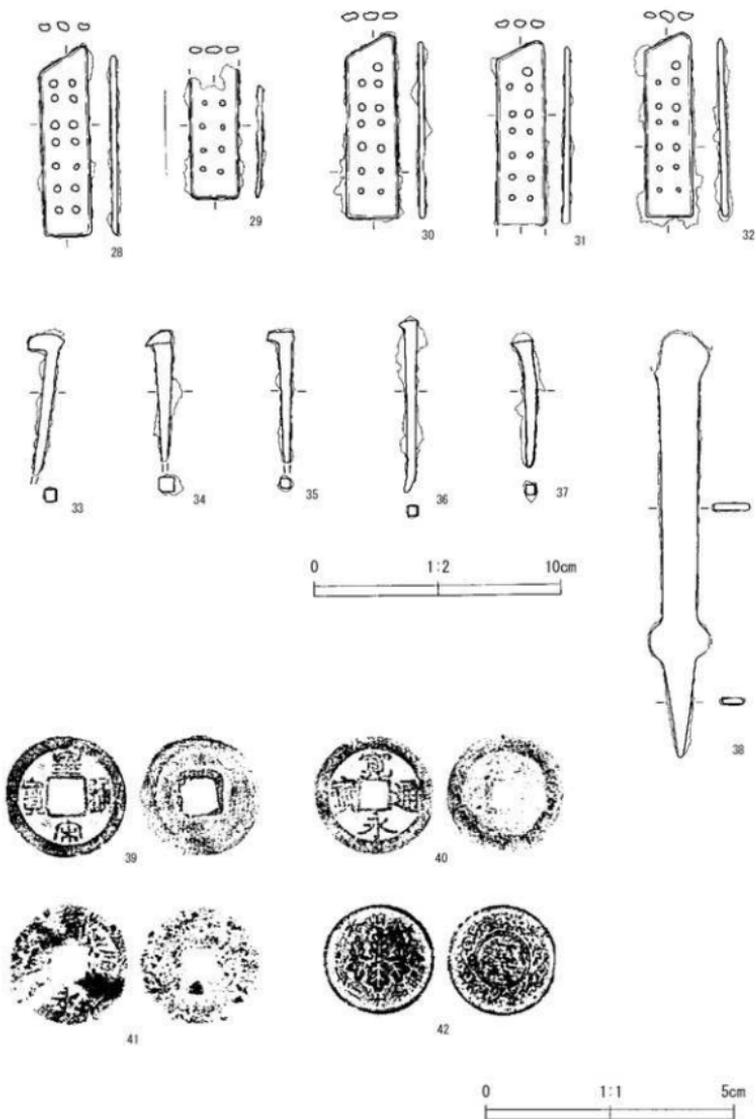
番号	種別	種類	出土位置	法量(cm)	重量(g)	素材	製造年代 (初鋳年代)
				直径			
39	銭貨	皇宗通寶	S I I床面	2.4	2.9	銅	1039
	平場2に位置するS I I床面で取り上げ 出土ポイントの記録ない 本銭						
40	銭貨	寛永通寶	平場1表土	2.4	2.8	銅	1636
	古寛永 銅一文銭 平場1(最頂部)で表採						
41	銭貨	寛永通寶	平場2の西斜面被覆土	2.4	2.9	鉄	18世紀以降
	寛永通寶 鉄一文銭 小札(28~32)と近接して出土 銭種は確実に寛永通寶と確認できる						
42	銭貨	一銭銅貨	平場9表土	2.2	3.7	銅	1937
	昭和12年桐一銭銅貨 平場9で表採 材質は銅の他、錫、亜鉛						



第22図 出土遺物 (1)



第23図 出土遺物(2)



第24図 出土遺物 (3)

V 総 括

1 挾田館跡の全体概要

挾田館跡は、大槌高等学校の南約300m、大槌川北岸に位置する比高44m程の中世の山城である。南北230m、東西180m程が範囲とされている。頂部は60m×15mを測るが、段差、傾斜がみられ、厳密には平坦な面は20m×10m程の狭い空間に限定される。そして、頂部を取り囲む形で帯状の平場が二段見られる。ここでは、この帯状の平場をそれぞれ「中段平場」、「下段平場」とする。この中段平場、下段平場は、一見すると帯状の平場に見えるが、厳密には複数の平場の集合体であり、「腰曲輪」が連なって、帯状になっていると理解すべきものである。頂部の北側の尾根筋には「堀切」が2か所あり、頂部と北側尾根を隔ている。この堀切はどちらも今回の調査範囲外に位置する。そして、今回の調査範囲の反対面に相当する城館の東側の中腹から麓には面積の広い平場が複数個所みられ、居住用の空間であったと推測される。城館の主要部は東側面と推測される。

2 今回検出の遺構

今回の調査で検出された遺構は、平場9箇所（平場1～平場9）、犬走2条（犬走1、犬走2）、竪穴建物1棟（S I 1）である。

発掘調査が行われた範囲は頂部と中段平場、下段平場を含む城館の西側部分である。

下段平場より下は急峻な造成された切岸で、幅の狭い通路状の「犬走」が異なる標高で2条横走する。下部に位置するのが犬走1、上部に位置するのが犬走2である。機能としては、斜面下部からの攻撃に対する防御の側の足場、通路と考えられる。

下段平場は調査区内では3ヶ所、中段平場は4ヶ所の平場でそれぞれ構成される。下段平場を構成するのが、平場7、平場8、平場9である。中段平場を構成するのが、平場3、平場4、平場5、平場6である。それぞれが、中段平場、下段平場内で段差を有して配置されており、各々の平場が防御の際の足場である「腰曲輪」と理解される。なお、各平場内の段差に比べると、下段平場と中段平場の間、中段平場と頂部の間の斜面は比高が大きく、斜度も急峻であり、一層の防御機能効果が図られている。

頂部は20m×10m程の狭い平場とその周囲に巡る通路状の平場で構成されている。最頂部の平場を平場1、周囲を巡る一段低い平場を平場2としている。最頂部は、挾田館の範囲とされる全体の中でも最高標高地点となるが、ここを「主郭」とするには面積があまりに狭く、物見台としての機能と想定したい。この地点は大槌川上流方面を遠望でき、対岸の大槌城とも見通しが非常に良く、物見台として最適である。頂部平場1の一段下には平場2が位置する。平場2の台部分を占める面積で、竪穴建物S I 1が構築されている。平場2自体の端部が崩落しており、S I 1のプランも損なわれているが10m×7m程のプランの建物と想定する。建物の機能は、物見台と推測される平場1と隣接することから、見張り要員の詰所、屯所と想定される。

各平場、犬走の年代は量り難いが、一連の防御機能の想定に則った構築と推測され、中世城館として挾田館が機能していた時間幅の中で、同時存在であったと想定したい。平場2及び、竪穴建物S I 1から出土した陶磁器の年代観は、大部分が15世紀後半～16世紀前半に収まるものであり、平場2及び、竪穴建物S I 1の機能した年代は15世紀後半～16世紀前半と想定される。この年代も挾田館の存続期間の中の一つを示すに過ぎないが、何らかの脅威があり、防御を固める画期であったとも想像される。よって、各平場、犬走の構築も15世紀後半～16世紀前半に行われた可能性も指摘できる。



第25図 扶田館と大槌城の周辺

また、今回の調査区からは、近世、近代の遺物が出土しており、城館廃絶後も、土地利用がなされていたことも明らかである。頂部の平場1からは近世から近代の奉納用の宝剣が出土しており、近世から近代に社や祠があった可能性が高い。

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、陶磁器（瓦質製品含む）25点、鉄製品13点、銭貨4点がある。この内、陶磁器は中世の中国産青磁碗9点（1～9）、中国産青磁皿2点（10、11）、中国産白磁碗1点（12）、中国産染付碗3点（13～15）、瀬戸産陶器花瓶1点（16）、瀬戸産陶器卸目付大皿4点（17～20）がある。また、中世の可能性の高い産地不明播鉢1点（21）もある。この他、産地、時期不詳の瓦質製品香炉？1点（22）、近世の肥前産染付碗1点（23）、近世以降と推測される染付小杯？1点（24）、近世と推測する肥前産？青磁香炉1点（25）がある。

鉄製品は、中世に属すると推測される鎌2点（26、27）、小札5点（28～32）、釘5点（33～37）がある。また、この他に近世～近代と推測される奉納用の宝剣1点（38）がある。銭貨は中世に属する「皇宗通寶」1点（39）、近世の「寛永通寶」銅一文銭1点（40）、「寛永通寶」鉄一文銭1点（41）、昭和12年の一銭銅貨1点（42）がある。

中世陶磁器の年代観をみると15世紀後半から16世紀前半にまとまりがある。周囲から出土した鉄製品の鎌、小札、釘も15世紀後半から16世紀前半のものと推測される。

4 挾田館に係る文献等

挾田館跡は、地域の他の中世城館と違わず文献史料が乏しく、来歴、城主などは不明瞭である。「岩手県の地名」（森嘉兵衛監修1990）では、「三浦家系図録（三浦家蔵）」を引用する形で、「大槌川の左岸、沢山には大槌氏の老職挾田越前の居館十王館跡がある」と記される。沢山の所在地から、執筆者の意は、今回調査がおこなわれた「挾田館跡」を指しての記述と解釈される。「大槌町史 上巻」（大槌町史編纂委員会1966）では「三浦家系図録」の一部が「大槌氏の滅亡」の章で引用されている。「当県領主大槌孫八郎政貞、御国大守利直公之命背、元和三辰年六月廿八日被召取於三戸奥瀬家江御預りトナリ跡ハ亡ス。老職挾田越前並諸家士一統離散ス 其え食挾田家郷士ト成テ此地ニ住居ス、則三浦家之元祖也」とある。また、「日本城郭体系2 青森、岩手、秋田」（本堂寿一他編1980）では、「その他の城郭一覽」の表中に「挾田館 上閉伊郡大槌町大槌字桑ノ畑 大槌川北岸の標高50mの丘陵先端にある。125×150mの規模で、最高所の主郭の前後に副郭が設けられ、二重の空堀で切断されている。館主は大槌家の家老挾田越前といわれている」と記される。館主「挾田越前」についての出典は特に記されていない。また、「岩手県中世城館跡分布調査報告書」（岩手県教育委員会1986）では、城館跡一覽表中に、「名称：挾田館 別称：七郎館、十王館 所在地：大槌字迫田、沢山 型式：丘陵、居館 現状：山林 遺構：土砂採取で一部破壊されているが平場3（主郭20×10m、その下位に3～4段の帯郭、東方の平場の周囲にも帯郭、西は一部破壊）北端に堀2。

城主等（文献）：阿部五郎七郎（挾田越前？）南麓に天明3の供養碑」と記される。この別称、城主等についての出典は記されていない。なお供養碑は、今回調査区外の挾田館南面の麓に所在する。「一字一石書寫 館主及眷属 後減々々盡等 寶篋印陀羅尼經 天明三癸卯季七月後力婆訶日 佛眼招精」と刻まれる碑である。天明4年は西暦1783年である。

5 まとめ

挾田館の南側、大槌川の対岸には大槌城が所在する。大槌城は地域最大規模の城館で大槌氏の本

拠とされている。大槌川の河口付近は港があり、また、大槌城の東麓には大槌市街地が広がっており、大槌氏が守るべき拠点と位置付けられる。扶田館と大槌城で挟まれた地点は大槌川流域の平地の狭隘部になっており、大槌川上流部や鯨峠を越えて浜街道を南下して来る敵対勢力が、大槌氏の拠点到侵入を阻止する最適のポイントとなる。扶田館の西面の急峻な切岸や、幾重にも構築された腰曲輪は、大槌川上流部からの侵攻に対するものであることは明確である。そして、対岸の大槌城と連携することによって防御機能はさらに高まったと考えられる。

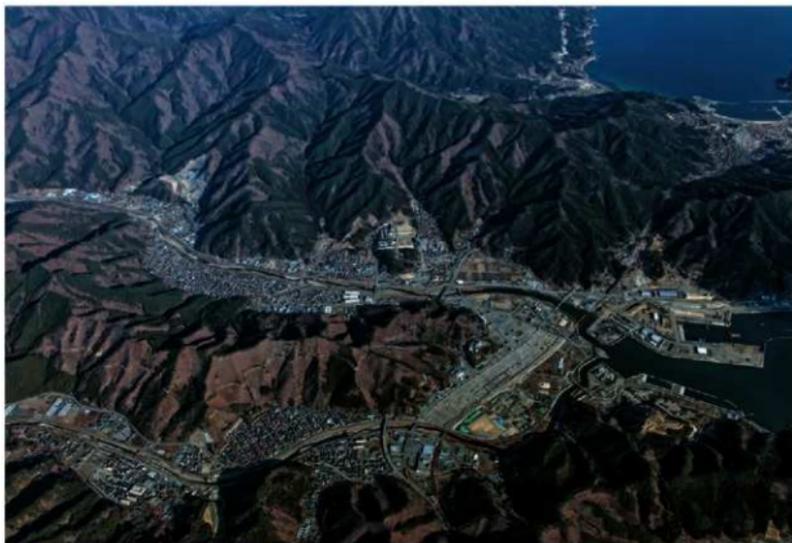
大槌町史編纂委員会 1966『大槌町史 上巻』大槌町役場

本堂寿一他編 1980『日本城郭体系2 青森、岩手、秋田』新人物往來社

岩手県教育委員会1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

森嘉兵衛監修1990『岩手県の地名』平凡社

写 真 图 版



狭田館跡 遠景（南から）



狭田館跡 全景（南西から）

写真図版1 航空写真（1）



調査区 遠景（東から）

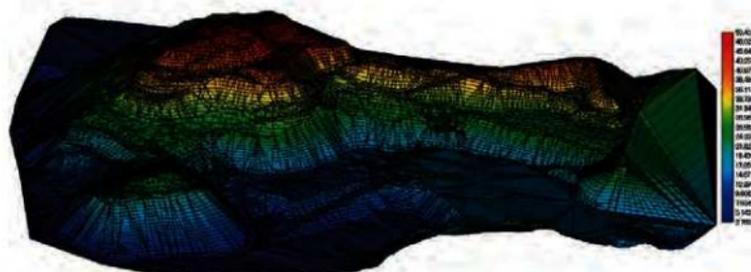


調査区 全景（直上南から）

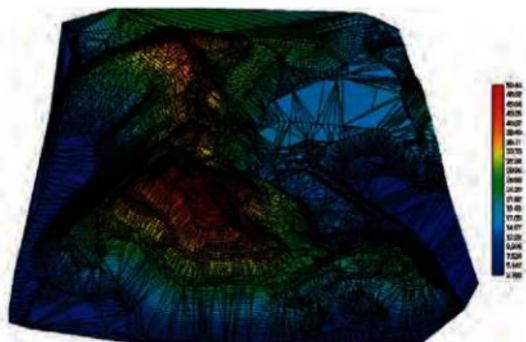
写真図版2 航空写真（2）



挾田館跡 3D 図(1)(西から)



挾田館跡 3D 図(2)(東から)



挾田館跡 3D 図(3)(南から)

写真図版 3 挾田館跡 3D 図

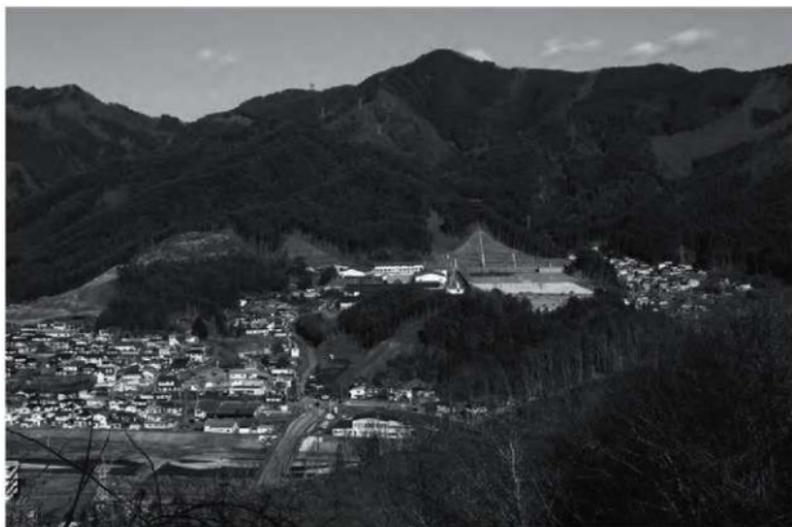


中世の陶磁器（外面）



中世の陶磁器（内面）

写真図版4 中世の陶磁器



大槌城から挾田館を見る（南から）



挾田館を麓から見る（西から）

写真図版 5 挾田館跡風景



頂部から中段を見下ろす



頂部から中・下段を見下ろす

写真図版6 頂部から下方風景



中段から頂部を見上げる



中段から下段を見下ろす

写真図版 7 中段から頂部・下段風景



下段から頂部を見上げる



下段から中段を見上げる

写真図版8 下段から上方風景



平場1 全体(南東から)



平場1 全体(北西から)

写真図版9 平場1



平場2 全体(南東から)



平場2とS11完掘(南東から)

写真図版10 平場2・S11



平場3 全体(南西から)



平場3 完掘(南西から)

写真図版 11 平場3



平場4 全体(東から)



平場4 完掘(東から)

写真図版 12 平場4



平場5 全体(北東から)



平場5 完掘(北東から)

写真図版 13 平場5



平場6 全体(北東から)



平場6 完掘(北東から)

写真図版 14 平場6

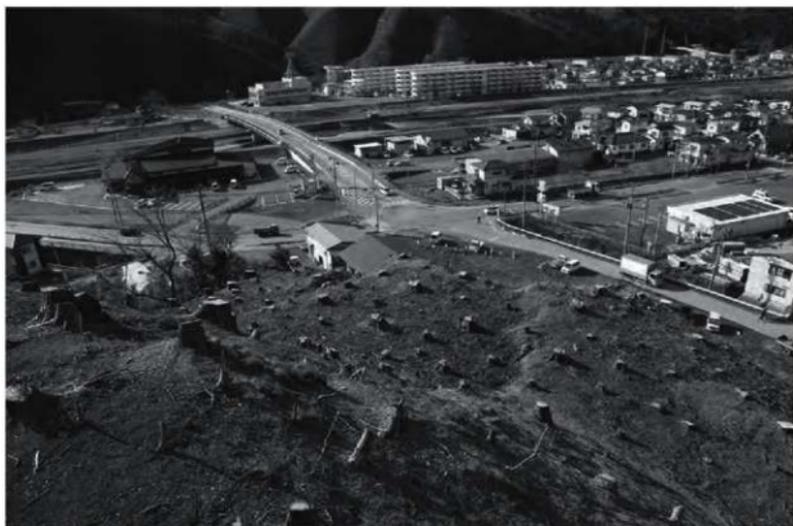


平場7 全体(東から)



平場7 完掘(東から)

写真図版 15 平場7



平場8 全体(北東から)



平場8 完備(北東から)

写真図版 16 平場8



平場9 全体(南東から)



平場9 完掘(南東から)

写真図版 17 平場9



犬走1 全体(南から)



犬走2 全体(南から)

写真図版 18 犬走1・2



竪穴建物S11 断面A-A'



竪穴建物S11 断面B-B'

写真図版 19 竪穴建物S11断面



竪穴建物S11 完掘（南東から）



竪穴建物S11 完掘（南東から）

写真図版 20 竪穴建物S11 完掘（1）



竪穴建物S11 完掘（南から）



竪穴建物S11 完掘（東から）

写真図版 21 竪穴建物S11完掘（2）



P50



P 1



P 2



P 4



P 5



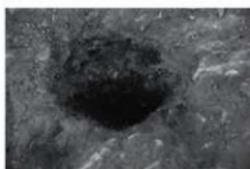
P 6



P 7



P 8



P 9



P10



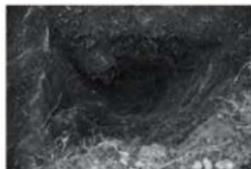
P11



P12



P13



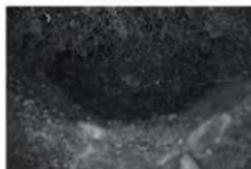
P15



P17



P18



P19



P24

写真図版 22 竪穴建物 S I 1 関連の柱穴 (1)



P27



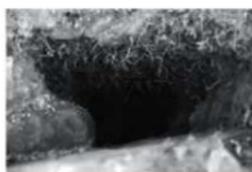
P29



P31



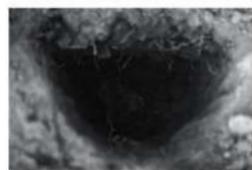
P32



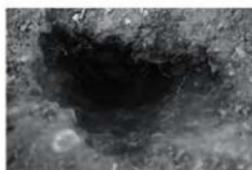
P33



P34



P35



P36



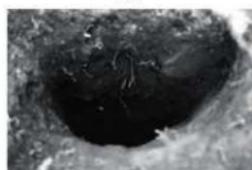
P38



P39



P40



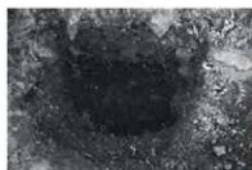
P41



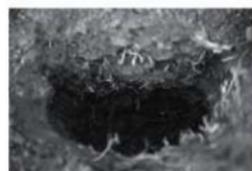
P42



P43



P44



P45



P46



P48

写真図版 23 竪穴建物 S I 1 関連の柱穴 (2)



調査区北側レベルバンク部分（1）

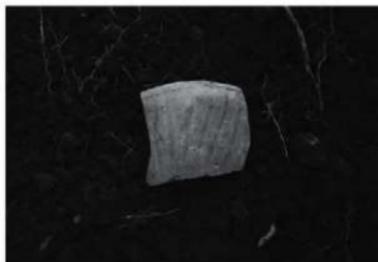


調査区北側レベルバンク部分（2）

写真図版 24 調査区北側（レベルバンク）



青磁碗 (1) 出土状況



青磁碗 (1) 出土状況 左と接合



染付碗 (13) 出土状況



染付碗 (14) 出土状況



鉄製品鏝 (26) 出土状況



鉄製品鏝 (27) 出土状況



鉄製品小札 (31) (32) 出土状況



瀬戸産陶器折 緑深皿 (17) 出土状況



南麓の天明三年館主供養碑



作業風景

写真図版 26 作業風景他

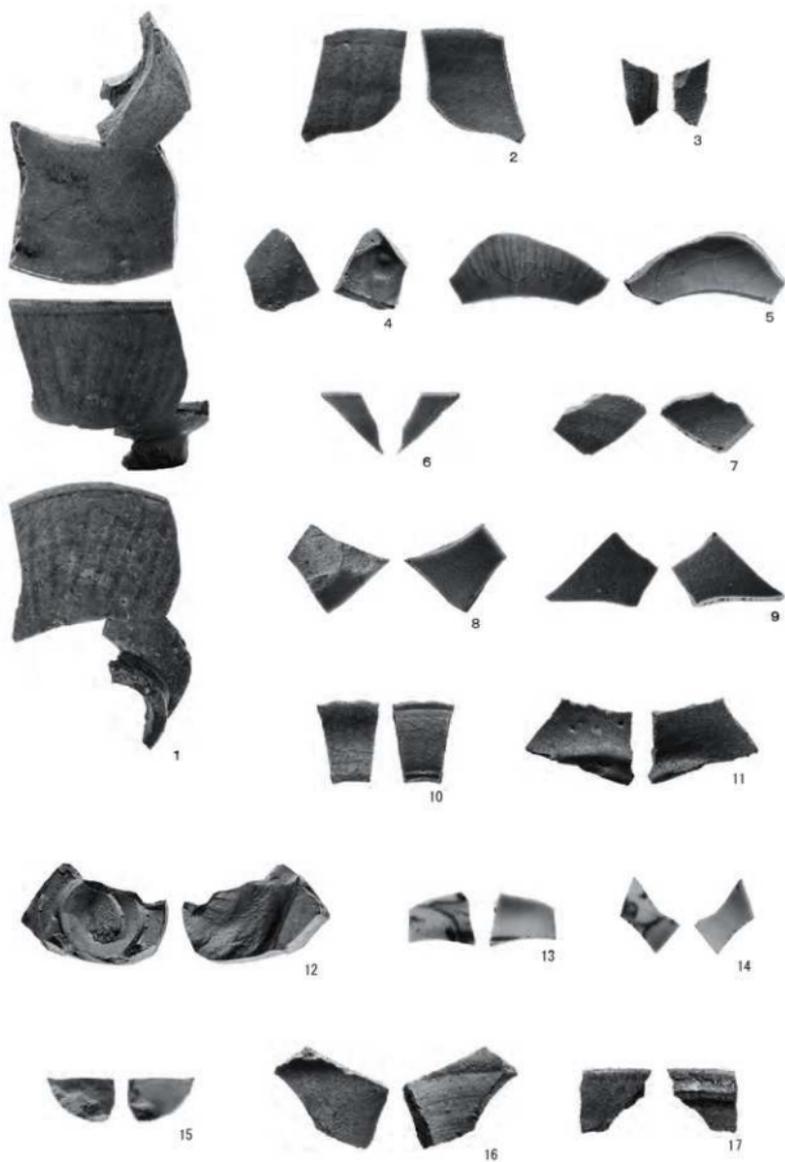


現地説明会風景（1）



現地説明会風景（2）

写真図版 27 現地説明会







30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42

報告書抄録

ふりがな	はさまたたてあととはくつちようさほうこくしょ							
書名	挾田館跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第706集							
編著者名	羽柴直人、野馬利彦、酒井野々子							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2019年 月 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はさまたたてあと 挾田館跡	かみへいでん 上閉伊郡 大館町 大館第23地 桐字沢山153 ほか	03461	MG33-0092	39度 22分 03秒	141度 54分 02秒	2016.10.03 ～ 2016.12.12 2017.04.06 ～ 2017.06.02	2,994㎡ 4,016㎡	三陸沿岸道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
はさまたたてあと 挾田館跡	城館	中世	平場 9箇所 犬走 2条 竪穴建物 1棟	中国産青磁碗 中国産青磁皿 中国産白磁碗 中国産染付碗 瀬戸産陶器花瓶 瀬戸産陶器目付大皿 鉄鍬 鉄製小札 皇宗通寶		陶磁器の年代は15世紀後半～16世紀前半が主体		
要約	<p>挾田館跡の調査で検出された遺構は、中世城館を構成する平場9箇所と犬走2条、竪穴建物1棟である。調査範囲の主体を占める南西斜面部調査区は、急峻な切岸と腰曲輪で構成されており、防御機能を重視した区域と理解できる。麓から中腹は急斜面で、犬走が2条存在する。中腹から頂部にかけては、9箇所の平場が存在し、防御の足場としての「腰曲輪」の機能が想定される。また頂部の南端部には竪穴建物が1棟構築されている。調査範囲の北西部では、人為的に構築された平場等は検出されなかった。出土遺物は中国産磁器（青磁碗、青磁皿、白磁碗、染付碗）、国産陶器（瀬戸産目付大皿、花瓶）、鉄製品（鉄鍬、小札）がある。陶磁器の年代観は15世紀後半～16世紀前半のものが主体を占める</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第706集

挾田館跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成31年1月7日

発行 平成31年1月15日

- 編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638 - 9001
- 発行 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
〒026-0301 岩手県釜石市鶴住居町第13地割1-4
電話 (0193) 28 - 4731
- (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番地1号
電話 (019) 654 - 2235
- 印刷 (株)橋本印刷
〒020-0061 岩手県盛岡市北山一丁目8番9号
電話 (019) 652 - 1354
-